

# 消費社会の神話と例外

克典



第一  
樂章

行き詰まった町

繊細な魂には生きづらい町

からくも彼は生き残り東京へ逃れた

通学路を辿っていた。

まだ陽があるというのに一見して泥酔していることが判る作業着の男が千鳥足で歩いてくる。日焼けしているうえに煤けた貌は黒ずんで見えた。一片の知性も見当たらない、縮まりのない貌つきだ。年相応でないつづらな瞳は小狡い小動物のそれだった。

兎にとって、男は、奇妙な生き物でしかなかった。

はからずも視線が絡んだ。兎の瞳が揺らいだ。男には慎みさえなかった。兎のそぶりに己の優位を誤信した男は、兎の行く手を阻んだ。

「なんやこら」

無力な兎は立ち竦むしかなかった。不条理の不意討ちに兎は為す術がなかった。

「なんとか云え」

そもそも頭の出来がよくない男だ。見通しもなしに行動し、程なくして立ち往生する。脈絡を形成できない。

ヒロユキ

彼方から兎を称ぶ声がした。男も兎も声の主の方に振り向いた。声の主は、少女だった。兎よりも幾つか年長のようだが、小学生だ。

だが、男はあからさまに狼狽えた。なるほど彼女は幼いながらもどこか凛としていた。しかし、小学生だ。男は絶対弱者だった。

彼女が割り込んで、ややあつて、男が矛を収めた。

バーカ

随分と子供じみた棄て台詞を吐き、その場を立ち去った。

遠ざかる男の後ろ姿を蹠踵と見送る疑似姉弟。姉の横顔を盗み見する。姉が緊張を解き、弟を見遣った。

「こわかったね」

母性的な笑みに、弟の口許がくしやりと歪んだ。姉は懐に飛び込んできた弟を抱擁

し、優しくあやした。

少女の名は、百合といった。

ギターケースを背負い、薄っぺらのボストンバッグを片手に提げた数年前のヒロユキが列車から降りてきた。やや緊張した様子で人波に身を任せる。貌つきにはまだあどけなさが遺っていて、一目で上京したてと判る。エスカレータの麓に人集りが生じていた。四方から人が現れ我先にと人集りに割り込んでくる。もみくちゃにされながらやつとエスカレータに辿り着き人心地ついた。意外にエスカレータには余裕があった。訝っていると、後ろの利用者が割り込んできて、ヒロユキを押し退けていった。閉口する間もなく、次から次に後続の利用者が最初の利用者に倣ったかのようにヒロユキを追い抜いていった。

夥しい数の改札の羅列に収斂しては分散してゆく人の群に度肝を抜かれた。たかが駅だというのに敷地は広大で、なかなか出口に辿り着けなくて難儀した。人いきれに汗が滲みはじめた頃、微かな外気に涼を獲

た。やがて外光が差し込んで、忽ちにして、氾濫した。視野に収まりきれない巨大なオブジェ群が妍を競っていた。いずれも自己主張が烈しく、調和を志向するでもなく、オブジェの見本市は、百花紊乱の様相を呈していた。

不出来でいつ崩落するとも識れない積み木を積み重ねたような都市の底を這う雑踏にヒロユキはまことしやかに紛れ込んだ。

カプセルホテルで寝泊まりしながら、一週間で棲むところを探した。予算が予算だけに、特に選択の余地はなかった。恙なく、風呂無しトイレ・玄関共同の安アパートに決まった。アルバイトを決め、落ち着いた頃に、バンドをやるための行動を起こした。

幾つかのバンドと接触を図った。なかなかいい返事が貰えなかった。セッションをしてみても、嘲笑を浴びせられることもあった。ヒロユキ程度のギターならこの街には掃いて棄

てるほどいた。尤もヒロユキを切り棄てた側もまた然りだったが。

紆余曲折の末にヒロユキは新バンドに参加することにした。ステージ経験が全くないヴォーカリスト志望の娘が発起人のバンドだった。それでもおめでたいヒロユキは自らの糧にしてみせると息巻いていた。

だが、バンドは意外にも息が長かった。

上京から一年が経つか経たぬかの頃になつた。

広くて天井の高い空間だが薄暗い。見慣れない様々な機械がその空間を包囲するかのよう配置されている。モーターの唸りや規則的な金属音が絶え間ない。淡い暗がりについてうつつすらと人影が浮かびあがる。白っぽいつなぎの背中だ。辺りを見回すと、やはりつなぎ姿の者たちが分散して佇んでいた。いずれの者も機械に向かい、同じ動作を繰り返していた。

掌ほどの大きさの冠状の形状をした薄紙の大群がダクトから吐きだされる。なかには不出来なものもある。ダクトの至近距離にいる者は逐一それを取り除いたり整えたりしている。

コンテナが山積みになった台車を圧す者がいれば、数十キログラムはあるものとおもわれる粉袋を肩に担いでどこかへ運ぶ者もある。

テニスラケットほどのしゃもじでどろどろの溶液を攪拌し続ける作業に専念している者もいた。

その空間の一隅で、傍に山と積まれた襖のようなものをベルトコンベアに載せる作業を延々と続ける者がいた。ヒロユキだった。積みまれているのは薄い金属板だった。襖ほどもある金属板を抱えあげてはラインに載せ、息つく間もなく次の金属板をセットするため、息を上げ、上体を傾げる。かれこれ五時間も立ちっぱなしでこの作業を繰り返していた。

単調な作業に注意が散漫になった頃、ヒロユキは手を滑らせた。

喧しい金属音が爆ぜ、作業員たちの耳目を集めた。

なにやってんだバカ

どこからともなく罵声が飛んできた。ヒロユキの頬に陰が浮かんできた。だが、大事には至らず、ヒロユキは作業を再開した。

彩りに乏しい工場に閉じ込められ怒濤のラインに組み込まれたヒロユキは、霞んで、みえた。

全体練習は週一だった。日曜日の夜に月曜日の始発までバンドでスタジオを押さえていた。だが、月日が経つにつれ、全員が揃わない日も珍しくなくなった。穴を開けなかったのは、マサコとヒロユキだけだった。

直前にライブを控えていて、そのライブ前では最後の練習日だった。さすがに頭数

は揃ったが万端とは云い難い仕上がりがりだった。それもその筈、全員が揃ったのはおよそ一ヶ月半ぶりだった。

始発前になって、マサコは、合宿を主張した。当然ながら、突飛な主張は物笑いの種にしかならなかった。メンバーたちはさっさとスタジオを出ていった。ヒロユキだけが、マサコの意気込みについては、斟酌した。

「結局、新曲できなかつたな」

ヒロユキが事実を口にする、マサコは敵意を剥きだしにした。我が儘でヒステリックな性分だった。ヒロユキは、怒れるマサコを放って、撤収作業に取り掛かった。

彼らの出演するライブハウスは、建物も設備も老朽化が著しかった。年季の入ったスピーカーの放つ轟音は勇ましかったが、よく耳を傾ければ、虚仮威しと判った。楽曲のみならずパフォーマンスも凡庸の一言に尽きた。キャパ五〇程度のハコだが、観客は数えられる程度しかいなかった。

ハイなマサコは、スポットライトに眼を射抜かれていて、マスターベーションを惜しげもなく晒していた。マサコの気丈さが痛々しかった。唱うことが愉しいのは伝わってくるがそれだけだった。

ヒロユキは実直に演奏をこなしていた。だが、特筆すべきものはなかった。ソロは肌理が粗く、腕の程が見え透いていたし、インプロヴィゼーションにもセンスは露ほども感じられなかった。それでもヒロユキは諦めていなかった。練習を続けてさえいれば、ステージをこなしてさえいれば、いつかは巧くなれるものだとおもっていた。



演奏していた楽曲のエンディングを迎えたが、拍手の疎らさが却って侘びしさを浮き彫りにした。

「今夜はありがとう。最後にもう一曲」

ヴォーカリストは、息を弾ませていて、一生懸命だったが、観客はお追従のような反応を示しただけで決してヴィヴィッドなものではなかった。

ドラムがカウントを取る。ベースとギターが合流する。ヒロユキのギターのみならず、ドラムもベースもどこことなく覚束無かった。ヴォーカリストは音を外してはいなかったが、声域が狭く、十人並みだった。

観客は、いずれもメンバーと所縁があった。メンバーの彼女だったりバイト仲間だったりきょうだいだったりした。彼らは拝み倒されて観たくもないライブにわざわざ足を運んでやった。然るに、今や彼らがメンバーに追従してやる他なかった。実に見窄らしいステージだった。最後の曲が終わるや、観客の

間に一仕事を終えたような安堵感が拡がった。

低予算にうってつけのチェーン展開する居酒屋で反省会という名目の打ち上げを行ったメンバーだが、建設的な意見はおろか反省の弁さえ聴かれなかった。ただ、安酒で酔っ払い、実りなき一夜を愉しんだだけだった。

内輪で愉しんだだけに終始したライブだというのにマサコは満足げだった。メンバーに抱きついて回っていた。ヒロユキも拒みはしなかったが瘦せぎすで骨っぽいマサコの躰は心地よくはなかった。

女を口説くためだけにバンドをやっているようなネモトは、人目を憚らず招待した夢見がちなフリーターの女とじゃれていった。しばしばキスマまで交わし、その都度周りからひやかしが起こった。マサコはわざわざ時間を割いて足を運んでくれた知人に対して夢を語り続けている。知人は人格者

らしかった。アルコール嫌いのロハスは、烏龍茶片手に持参したポータブルゲームに興じていた。

ロハスの他にもう一人だけ酔っていない人物がいた。ヒロユキだった。呑まなかったわけではない。幾ら呑んでも酔えなかったのだ。ヒロユキは、やっと、一年に亘ろうとしているライブから反省会の一連の次第の反復に対し、当事者ではない視点を獲ようとしていた。

家賃はともすると吹き曝しの駐車場代よりも廉かった。風呂無し、トイレ・玄関共同のアパートはエアコンはおろか地上波プラグさえなかった。

雑然とした四畳一間にギターが我が物顔で鎮座している。卓袱台はインスタント食品の容器で埋め尽くされている。金目のものといったらギターの他にはラジカセくらいしか見当たらない。

木賃宿のような隙間風が吹き込む安アパートの一室がヒロユキの棲み処だった。他の住人はいえ、ブルカラーか苦学生か身寄りのない老人だった。安普請だけに隣人の息遣いさえ漏れ聴こえるほどだった。

銭湯に通い、粗食で喰い繋いだ。コインランドリーで洗濯をしても節約のために乾燥機は使わなかった。夏を迎えたが、量販店の扇風機しか買えなかった。だが、熱を孕んだ空気を掻き混ぜるだけで、涼はとれ

なかった。雨露を凌げるだけの物置だった。ヒロユキはじっとしている。躰が怠くて、丸めた布団に寄りかかったままだ。

追いかければ追いかけるほど、遠退いていつているような気がした。音楽だけが自らと共同体とを繋ぐものだと頑なに信じていた。だが、いつか音楽の効力も自信も薄れつつあった。何故かいつだって浮いていて余分でのにされていた。窮地に垂らされた蜘蛛の糸が音楽だった。これしかないと賭けた。いつかヒロユキは、汗を掻いていた。暑さのせいではなかった。

ひっきりなしに電車が通過する駅のガード下に順次的に増改築された商店街はうらぶれていて陰気だった。地上とガードの間に建てることのできるのは二階までだった。立地条件は云うに及ばず、況や二階だ。電車が通過する度に、さながら地震のように揺れた。

その安酒場の壁はベニヤだった。張り方が雑で、所々、裂け目があった。そこから覗くはブロックだった。

ふらりと立ち寄ったヒロユキは、バドワイザーを呑んでいた。壁に貼られたお品書きに載っている銘柄で唯一識っているものだったからだ。ヒロユキは居合わせた中年に話し掛けられて、律儀に相手をしていった。

「……レヴェル低いんだよこの国はよ。どいつもこいつも眼が節穴でよ、才能見抜けねえんだよ」

中年の独演会にヒロユキは仕方なしに付

き合っていた。滔々と語る中年は、芸術家を  
気取っているのか長髪だが、髪は傷んでいて  
艶がない。

「日本で売れても、ね。音楽聴けてない国な  
んだからさ」

どうやら中年は、ミュージシャン志望の模  
様だ。身形からして定職に就いているふうで  
はない。それにしても、精彩を喪っている。  
眼は濁り、肌は萎れている。

「……コネだよ、やっぱり」

中年は虚空を見遣り付け足した。ヒロユキ  
は、中年の横顔に唾然としていた。中年は、  
頻りに煙草を喫っていたが、それは本人のも  
のではなく、ヒロユキに無断で次から次に火  
を点けていた。

座が弛緩した。俄に中年が鞭打たれように  
姿勢を正した。

「やべえ。そーいや打ち合わせだった」

誰にともなく独白する。

「あんちゃん、きょうはごちそうさん、また

な」

奢るなんて約束は取り交わしていない。  
ヒロユキが予期せぬ展開に泡を喰っている  
隙に、中年はさっさと出て行ってしまっ  
た。

「心配するな」

店主だった。貌だちや体軀は中性的なが  
ら剣呑な雰囲気に覆われた男だった。

「いつもの手口さ。誰彼構わず話し込ん  
じゃあ『急用ができた』ってバックレやが  
んのさ」

ヒロユキは、店主の種明かしに苦笑を禁  
じ得なかった。だが、ヒロユキの苦笑は、  
まだあどけなさが認められた。

「ジョン・レノンも罪作りだよな。才能つ  
てものは天才には判らないんだよな。努力  
は必ずしも報われない。いや、寧ろ報われ  
ない場合の方がきつと多いんだけどよ。  
さっきのアイツなんかはジョンのメッセー  
ジ真に受けちゃったクチさ」

店主の鋭利な舌鋒に気圧されてヒロユキは沈黙するしかなかった。

「みたところ、あんちゃんもミュージシャン志望か」

店主は、一旦、視線を宙に泳がせた。

「九九・九九パーセント売れっこねえ。ぜつてえアイツみたくなるぞ。そんな連中、佃煮ができるくらいこの街にいるんだ」

反感を覚えてヒロユキは店主の双眸を見据えた。だが、店主は怯まなかった。

「眼を醒ませ」

店主は、ヒロユキを見返したまま、語りかけた。ヒロユキは持ち堪えるのに必死だった。

混雑によりダイヤが乱れた結果、ヒロユキは遅刻した。仲間の手前、やや緊張してスタジオの扉を押し開けたヒロユキだが、拍子抜けした。ヴォーカルしかいなかったのだ。待ちぼうけを喰わされたマサコは不機嫌さを取

り繕おうともししていなかった。鏡越しにヒロユキを一瞥しただけで口もきかなかった。触らぬ神に祟りなしと、ヒロユキはさつさとセッティングに取り掛かった。ソフトケースからギターを取りだし、シールドを床に垂らし、ギターとアンプを接続する。アンプの主電源を入れ、ミュートされたヴォリュームを調節し、チューニングを始めた。相对音感さえあやふやなヒロユキは、チューニングだけでも四苦八苦した。やがてヒロユキは練習を開始したが、他のメンバーはなかなか現れなかった。

一時間が経った。既に最寄り駅の終電時刻は過ぎていく。スタジオは始発まで借りているから追い出されることはないが、メンバーが揃わなければ意味がない。マサコは苛立ちを増し、ヒロユキもパート練習に倦みはじめていた。

ヒロユキは一息入れにラウンジへ行こうとスタジオをでた。扉を背にするや、ポ

ケツトの裡で携帯電話が震えた。メールがあった。本文を一読したヒロユキの横顔に反応は見受けられなかった。扉を押し頸だけ突っ込んだ。

「ノブはバイトでこれねえって」

マサコはあからさまに柳眉を逆立てた。ヒロユキは、そそくさと一服しにその場を立ち去った。

水が張られたバケツに、灰を落とす。水に浸った大量の吸い殻がきつい匂いを放っている。ふと気を緩めると、躰の奥底に疲れが澱みとなって、ヒロユキは気付いた。はしたガネのためのアルバイトは仮の姿の筈だ。いつかはきつと音楽で喰える筈だ。辛抱しなければならぬのは今のうちだけだ。短くなった煙草を棄て、気を取り直す。火種の消える音が合図だった。

スタジオに戻ると、マサコが帰り支度を始めていた。

「何してんの？」

「サトウもこないって。バカにしてる。気分悪いから帰る」

引き留めようとしたが、マサコはさっさと帰ってしまった。それでもヒロユキは一晚中練習に励んだ。

女は弁髪のような髪形だった。三つ編みにしているが側頭部は刈り上げられている。複数の色でカラーリングされている。その横顔は人工的な清澄さに覆われていた。

女のものではない双眸が安定することなく頻りに焦点を移している。

女はその双眸が放つ視線を無視し続けた。果てしない沈黙に耐えかね、侍臣が身動きした。機敏に女は振り向き、視線を向けた。侍臣の双眸が揺れる。

牽制の効果を認めると女は再び眼を離れた。

「肩揉んで」

不意を衝かれまごついていると女の形相が一変した。

「揉めつつってんだらう」

感情の迸りに弾かれて、侍臣は女に近寄った。

女は妙に悩ましい息継ぎや身動きをした。

故意だった。侍臣は恐る恐る禁じられた試みを実行に移した。

指先が触れると女は反応、然るべき行動に思い至った。女は尚も愛撫を加えようとする諸手を振り解きに掛かりつつ屹度頸を巡らせる。

「何考えている？」

侍臣は畏縮したものの女の左右の乳房を掴んだまま離さない。女は緊張して藻掻いた。揉みあいになり、侍臣が女を組み伏せた。

前腕が女の喉を一文字に塞ぐ。

女は呻吟しながら侍臣の貌を窺い、愕然とした表情を示した。

侍臣の瞳に渦巻いていたのは愛情とも憎悪

ともつかない執念深い感情だった。

女の口角から唾液が、垂れる。

声にならない声が洩れる。

侍臣から逡巡は読み取れない。

侍臣の前腕が力の拮抗により震えている。女の抗いが弱まり、侍臣の意が遂げられるかにおもわれた頃、つと、女の腕が撓った。獲物を襲撃するキングコブラ。コブラの鎌首が侍臣の股間を捉えた。侍臣は振り解こうとしたが遅きに失した。

五本の牙が侍臣の性器に衝き立てられ侍臣はもんどりうって女から離れた。

女は素早く立ち上がると床に転がる侍臣の喉を踏みつけた。一頻り、喘ぐ貌を拝んでから、腰を低くした。

「おいたが過ぎるよ？」

赦しを乞う眼差し。

「ほんつとに悪戯好きね」  
存分に勿体つける。

「いいわ坊や」

侍臣は口許を歪め女にしがみついた。女は彼をあやし、仰向けに寝かせた。そして、跨がった。

「気持ちよかった？」

「うん、ママ」

甘えた声だった。断じて、戯けているのではなかった。

昼下がりのがらんとしたアーケード街をギターケースを背負い、めかし込んだヒロユキが歩いている。バイト先から厭味を云われながらもライブのためにスケジュールを確保した。ショウウインドウに映った己の姿が視界に入った。ヒロユキは気まずそうに貌を背けた。ガラスに映った青年が精彩を欠いているような気がしたからだ。

会場のライブハウスに着く。鉄扉を潜ると、俄に光量が著しく減り、目眩ましに遭っ

た。

「おつかれ」

客入れ前の会場には、マサコだけだった。ライブのときだけ、マサコは上機嫌だった。リハ開始時刻まで残り一五分を切ったが、他の連中はまだだった。矢鱈と元気なマサコを余所にヒロユキは、カウンターのスツールに腰掛けて、所在なく過ごした。案の定、遅刻者が出て、リハ開始は一五分遅れた。それでもマサコの機嫌は悪くはならなかった。

海岸は峻険でおよそ行楽と縁がなさそうだ。毀れた舟がほったらかしにされていて、フナムシやカニが棲みついている。海沿いに、ちいさな集落があった。

絶えず海風に曝されるせいで校舎の風化が早い。至る所が粉をふいていて触るときらつく。トマソンと化したハンドボールのゴールは大部分が塗装が剥げ落ちて錆びつ



き腐食が始まっている。どの遊具も朽ちかけていて、恰も遊具の墓場のようだ。

授業の時間帯で、校舎内は静肅だ。三年生のその学級の教室でも授業が行われていた。定年まで残すところあと数年と思しき初老の男性担任が教壇に立ちルーティンワークをこなしている。整然と子供たちが座して健気にも授業を受けている。どの貌もあどけない。その教室の片隅に、ヒロユキがいた。見違えるが、面影はある。

チャイムが鳴る。歓声が、弾ける。担任はチャイムに遮られた話を続けることをあつさりとは断念した。

三々五々、子供たちははしやぎ回り、賑々しかった。小動物よろしくじゃれあっている子供たちもいる。

生来大人しかつたヒロユキは、席に着いたままだった。ヒロユキはこつそりと左腕の袖口を捲り左手頸を眺めた。そのか細い手頸にはミサंगाが巻き付いていた。百合に貰った

ミサंगाだった。

願いが叶うんだよ、と云いながら、体形が変わりはじめた頃の百合がヒロユキの手頸に巻いてくれた。

「なんやそれ」

やんちゃな一団が物珍しいものを放っておく筈がなかった。ヒロユキは咄嗟に隠したが、手遅れだった。

「なんやて訊きよろうが」

気圧されて、ヒロユキは怖ず怖ずと左の手頸を差し出した。

担任が教室に現れた。児童らの悶着を認めめた。

「なんばしよつと」

ヒロユキを囲んでいた子供たちは俄に勢いを喪った。ややあつて、一人が告発した。

「ヒロユキがこぎやんとば学校に持ってきとると」

児童がヒロユキの腕をとり、担任にみせ

た。

一旦、担任は些末なこととして看過しようとした。だが、ヒロユキを取り囲む子供たちの狂信的ともいえる排他性に担任は靡いた。

「いますぐ外して預けなっせ」

ヒロユキの貌が強張る。担任のお墨付きを獲た子供たちは凶に乗る。

「外せよ」

「ならば考えとつとや」

「早くせんか」

どの貌も嗜虐性に富んでいた。

ヒロユキは、のろのろとミサंगाを手首から外した。

そのミサंगाが再びヒロユキの手首に巻かれることはなかった。

袖から舞台にでたが、反応がなかった。ヒロユキたちの視線が雑談に興じていた数えられるほどの観客らをして拍手せしめた。ヒロユキは動揺を押し隠してアンプのスウィッチ

を入れてヴォリュームを捻った。

さすがに、懸隔を悟った。墜落は時間の問題だった。数えられるほどの観客はいずれも顔見知りだ。客を呼べないバンドに割り振られる開演時刻は陽の暮れないうちのままだ。ヴォーカリストの意地とヒロユキの真剣さだけで持っているバンドだけに、魅力はなかった。あとのメンバーは、意気込みも実力も中途半端だった。尤も、ヒロユキもマサコも一人前なのは意気込みだけだったのだが。

マサコは、気丈に振る舞っていた。聴衆が皆無に等しいにも関わらず、積極性を損なっていないようにみえた。一曲目のギター・ソロに差し掛かった。ヒロユキは、雑念を意志によって振り払って、左手の位置をハイ・ポジションに引き上げた。

程なくして、エンディングを迎えた。疎らな拍手が却って憐れを誘う。持ち時間は三〇分だが、折り返さないうちに客の集中

力は途切れていて、携帯電話を操作する者がいれば、バー・カウンターで話し込む組もいた。

スポットライトの孕んだ熱が、ヒロユキを攪乱しはじめていた。

いつかヒロユキは客席からステージを観ていた。楽曲は平板かつ一片のオリジナリティも見いだせなかった。マサコは不器量ではないが愕くほどの美貌でもなく声域も人並みなら声にも魔力がなかった。ベース・ドラムのリズム・キープはとりあえずシユアだ。キーボードは、幼少の頃から心得があるらしくて、不可はなかったが可もなかった。そして、ギターだが、キレが悪かった。どことなくたどたどしく、フレージングも使い古されているばかりではなく不出来なコピーだった。もどかしいギターは、聴く者をしてストレスを与えていた。

ジョン・レノンが悪い。

擦弦が浅くなり、音素がささらになった。

慌てて立て直そうとした。

ふとマサコの姿が眼に入った。マサコが、見窄らしく、ヒロユキの眼に映った。

あからさまなミス・トーンが楽曲を穿った。マサコが非難の視線を向ける。ヒロユキは、滅茶苦茶なインプロヴィゼーションでお茶を濁そうとした。だが、楽曲の倒壊を防ぐことは能わなかった。

迷走のさなか、またしてもヒロユキは聴衆の一人になっていた。

なんやこれ。

意地の悪い子供の声だった。あのミサングはどうしてしまったのだろうか。あのミサングを失くした時点で、結末は決まっていたのか。

ギタリストは、投げやりにバレー・コードを弾くや、絶叫しながら、ストラップを肩から外し、ギターを床に叩きつけた。

シールドが断線し、厭な音が場を劈いた。ギタリストはステージから飛び降り、ス

ステージにはネットクがへし折れてゲージというゲージがあらぬ方向に飛び跳ねたギターだけが遺された。

ヒロユキは、ひたすら、趨った。ステージから、バンドから、そして音楽から遁れるために。捉えられないように、アーケード街を逆走した。同時に、あのミサンガを追い掛けていた。取り戻せないことを識りながら。

我に帰ると、室にいた。夜の帷が降りていて、室も夜に侵されていた。ヒロユキは、壁に凭れて抱え込んだ膝に貌を埋めていた。もう涙は涸れた。ヒロユキはのろのろと面を上げた。眦を決しているふうだった。やおら、腰を上げた。

鴨居に五寸釘を打ち付け、シールドを引っ掛けた。シールドで輪を結んだ。一旦、躊躇ってから、その輪に頭を潜らせた。ゆっくりと眼を閉じ、軀を宙に浮かせた。シールドが頸動脈を塞ぎ、頸椎が軋んだ。同時に、畳

の上に叩きつけられた。

ヒロユキがのろのろと鴨居を仰ぎ見ると、鴨居の一部が剥げ落ちていた。五寸釘は、ヒロユキの傍らに転がっている。鴨居はとうに腐っていて、ヒロユキの体重を支えることさえできなかつた。

「こんな室じゃ死ぬこともできねえのかよ……」

ヒロユキは、擦り切れた畳を睨んで嗤笑を浮かべていた。

テニスコートほども広さのある室は、がらんとしていた。カウンターがあるところを見ると、どうやらかつては店舗だったらしい。壁はコンクリート打ちっ放しで配管が剥き出しで天井をパイプラインが疾っている。室の一角に一对のソファとテーブルが配置されていて、一団が陣取っていた。

煙草を喫っている男の眼は猛禽類のそれだった。細面だが、上背はあった。剣呑な雰囲気を身に纏っていたが、貌つきから知性が窺えた。きつと意識的にどこまでも非情になれるのだろうか。

ノートパソコンのディスプレイを凝視しているフレームノイアは、座に於いて最年少だった。中性的で端正な貌だが、表情は能面のように微動だにしない。黙々とキーボードを操作している。

全身レザーづくめの女は、弁髪のような髪形だった。三つ編みにしているが側頭部は刈り上げられている。複数の色でカラーリング

されている。彼女には、史上にその名を轟かせる冷血女王らを彷彿させるものがあった。

ガムを噛んでいる坊主頭は、矢鱈と視線を移していて神経質そうだった。スレンダーな体型だが、筋肉に覆われていて、タイトだった。大人しくしているのが苦手らしく飽きずに貧乏揺すりを繰り返している。

一人だけ、頬を緩めっぱなしの男がいた。いつか弁髪の女に傅き犯されていた男だ。獰猛そうにも誠実そうにも見える。割り切れない数のようだ。まるで期待に胸を膨らませた幼児のように同席者たちの様子を眺めていた。

シュンが口火を切る。

「結局、何人要るんだっけ」

媚びを孕んだ口調は、天賦の演技性が無意識に採択したプランだった。

「……ミニマムで七人」

フレームノイアはノートから眼を離さずに云った。金属的で明澄な声だった。

「七人」

シュンは、戯けた表情を作り、二人に目配せを送った。

仲谷の猛禽の眼は副流煙の行方を追っている。弁髪は乾いた唇を舐めて進展を待った。

「二・三人でいいか」

仲谷が訊く。

フレームノイアは声も発さなければ面も上げずに微かに頷いただけだった。

軽量級ボクサー崩れの福士は、根気がなかった。彼にとって、一進一退を常とする

デイスカッションは苦手な作業だった。ずっと貧乏揺すりをしている。

「……それ止める」

フレームノイアがぼそつと云った。

「あん？」

福士が色めきだつた。

「おい」

ヒロユキだった。有無を云わせぬ力を帯びていた。俄にシュンは柔和な表情を一変させた。その一喝に、ボクサー崩れは不承不承矛を収めた。

「明日から人集めだな」

仲谷が総括した。

「それじゃ今日は解散でいいよね？」

ペットが待つてるから」

さつさとシュンはカフェ跡をでていった。

「あいつペットなんて飼ってるのか」

仲谷の問いに弁髪のリサは小首を傾げてみせた。

アルファロメオが走行する。

ドライヴァーはシュン。

照明が絞られたカフェ跡。

デイスプレイが一人残ったフレームノイ

アを照らしている。

あるかなきかの規則的な物音。

フレームノイアの視線はディスプレイと結びついたままで。

フレームノイアの股間で弁髪が揺れていた。

そのマンションはリゾート・マンションと見紛うような外観だった。

その一室、佇んだシュンの視線は足許に向けられている。

金網に食い込んだ十本の指先は動脈血のように赤いマニキュアに彩られていた。

鉄道の立体交差を貫く陸橋、くびれた腰と地続きになった小振りな尻を富士が前後に揺さぶっていた。

その度に、弁髪が揺れた。

販売員やホテルマンのような出来過ぎの笑みを湛え、口を開く。

「ただいま」

反応はない。

「ただいま」

やはり、応えはない。

つと、シュンの貌から出来過ぎの笑みが蒸発した。

ただいまって云ってんだろぅが足蹴にした。

ペットは鎖に繋がれた、女だった。一糸纏わぬ姿で鎖付きの首輪をされた女は全身痣だらけだったし、貌も所々腫れていて生傷が認められた。

……おがえりなさい

シュンは幼児のように貌を綻ばせた。

耳を聳する轟音と地響きが延々と繰り返されてきた。仮設塀に閉ざされた空間で、ヘルメットを被り作業着を着用した大勢の作業員が、三々五々、作業に取り組んでいる。彼方此方に資材が野積みされている。成果物の仕掛かりである鉄骨の骨組みは高さがおよそ五〇メートルに及ぶものだ。セーフティネットを下から覗くと、火花が降ってくる。溶接工が、高い位置にいる。キャットウォークを平然と移動する作業員の姿もあった。

資材の運搬に従事する作業員たちの群れに、ヒロユキが紛れていた。陽灼けしている。ヒロユキの貌つきは、以前のそれと較べると、幾らか老成していた。つまり、相対的に若さを損なっていた。無表情のまま、黙々と反復作業をこなしていた。

ひねもす肉体を酷使する労働に励み、やつと解放された。ヒロユキは、悲鳴をあげる肉体に鞭打って、バラックが寄り添い軒を連ねる横丁に辿り着いた。既製品の耐ハイが缶の

まま、供される。ヒロユキは、雑な手つきで封を開け、胃に放り込む。安いだけに粗悪品で、薬品らしき成分に舌に痺れを覚えた。赤提灯だが、店主は日本人ではなく、アジア系の外国人で、日本語が覚束無い。敷居が低いだけに、客層はお世辞にもよいとは云えない。年齢にそぐわない出で立ちの年増はおそらく立ちんぼだ。薄汚れたつなぎを着た小男は勿体なさそうに濁酒を啜っている。臨時収入を得たらしいホームレスさえいる。

串ものの具も、いずれも売り物にならないようなもので、固かったし、噛み切っても味気なかった。ガスの匂いと古くなった油の匂いは胸やけを催させたし、劣化した蛍光灯の貧弱な光が寒々しかった。

ヒロユキは缶耐ハイを頼んだ。空にしたアルミ缶を握り潰す。煙草に点ける。味わいもせず、肺が破裂せんばかりに喫ん



だ。

「耐ハイお待ち」

差し込まれた缶をひったくる。不味い串焼きの具を喰い千切りながら、開封し、口腔に散らばったパサパサの肉を一掃するため、煽った。

暖簾を潜りだしてきたヒロユキは、足を踏跟けさせた。目的地も定めずに、歩きはじめた。横丁を這いだすと、賑やかで華やかで煌びやかな都市がしかと温存されていた。酔いに浮かされたヒロユキは、のろのろとそぞろ歩いた。寒い風が心地よかった。ガードを通り過ぎるや、不意に街並みが品を失い、けばけばしいネオンサインのモザイクに突き当たった。誘蛾灯に誘われる害虫のように、ヒロユキも東洋一と謳われる歓楽街に自ら吞まれていった。

辿り着いたのは、古びた雑居ビルの地階

だった。昇降口が通りに面していて、品はないが人目は惹く電飾の煩い看板が表にだされ

ていた。ミラーボールの放つ光の点描画が、ボックスから覗く肉塊に投射されていた。

通された席でヒロユキは酔いを振り払おうと試みていた。気配を感じて、そつちを振り向くと、ボーイだった。

「向日葵さんです」

ボーイの隣にコンパニオンがいた。ヒロユキは、愕いた表情をみせた。それも無理はないくらいに、向日葵の笑顔は眩しかった。

「こんばんわ。向日葵です」

向日葵はヒロユキの様子を訝りつつもヒロユキの隣に滑り込んだ。

「きようはお仕事帰りですか」

「ああ」

「こちらは初めてですか」

「そうだ」

向日葵は、微笑を絶やさずに、ヒロユキに甲斐甲斐しく語りかけた。

一頻りすると、向日葵がヒロユキの懷に潜り込んだ。ぎこちないヒロユキを余所に、自ら唇を重ね、乳房をさしだし、ヒロユキの怒張をまさぐった。されるがままだったヒロユキの変化を見計らって、着衣を脱ぎ棄てた。

向日葵の乳房は形がよく触れるのが躊躇われるほどだった。向日葵はヒロユキに己が躰を堪能させてから、ゆっくりと躰を屈めた。

向日葵の艶やかな頭髮が収縮する。めくるめく快感がヒロユキを包み込む。兆した。ヒロユキは向日葵の耳許に口を寄せてその旨を伝えた。向日葵は愛撫を緩めるどころか却ってより念を入れた。

上下していた水母が凍りつき、力尽きたヒロユキはそれを庇うように躰で抱き込んだ。すっかり余韻が行き過ぎると、向日葵は面をあげてヒロユキの貌を仰ぎ見た。

「気持ちよかった？」

行為の陰惨さとは裏腹に、向日葵の表情は柔和だった。ヒロユキは、向日葵の屈託のな

さに当惑した。

「気持ちよくなかった？」

「いや」

「よかった」

一旦は表情を曇らせた向日葵だが、ヒロユキの応えに破顔した。

時間になるまで、一緒にいた。会話は途切れがちで弾んだわけではなかったが、ヒロユキは一滴の水を恵まれたかのような心持ちだった。

「ありがとうございます」

見送りについてきた向日葵が頭を下げた。

「こっちこそ……」

「え？」

「いや、何でもない」

ヒロユキは、向日葵を置いて、その場を立ち去った。

死に損なつたヒロユキは、喰うために、生きていた。端金で買い叩かれ、コンクリート塊を運び鶴嘴を振るう。汗だくになり埃に塗される。昼夜を分かつずに、作業が割り当てられる。劣悪な労働環境の改善という課題をいつだって先送りしてきた業界は、慢性的な人出不足で、無茶な出勤要請でも渋りもしないヒロユキのような人形は重宝がられた。

ひねもす濁つた空気に巻かれて、一切の創意工夫を要求されない単純作業に勤しむ。日毎に生命が色褪せてゆくようだった。それでも、バンドをやりながらバイトで喰い繋いでいた時分よりは生活は楽だった。

給料日が待ち遠しかった。給料日前は、まっすぐ帰宅して浴びるほど安酒を煽って眠った。ヒロユキは変わった。身形にも構わなくなつたし、屋外作業に従事しているうちに、随分と陽灼けした。

いまや、地底での彼女との束の間の逢瀬だけがヒロユキを衝き動かしていた。

体液の匂いを消すためとおもわれるパフュームが殊更に強調された地底で、ヒロユキと向日葵が逢瀬の最中だった。狭いソファで寄り添い、制約されながらも二人はせつせと愛撫を交わしていた。

舌を縛れさせ、陶然とした視線を交わす。ヒロユキは向日葵の乳房に頬ずりをしその頂に接吻けた。向日葵は慈しむような眼差しでヒロユキの髪を撫でていた。次第通りに事は進み、ヒロユキは向日葵を消費した。

そのあとは、共犯の親近感が二人にもたらされていた。虚脱したヒロユキの肩に頭を凭せかけていた向日葵がふと漏らした。

「お花屋さんやりたいの」

ヒロユキは向日葵が言葉を継ぐのを待った。

「お母さんと一緒に、ね。それでね、お母

さんが店番してたりするんだよ」

向日葵の夢そして夢を語る向日葵の声は子守唄のようによくすぐったくも心地よかった。いつか向日葵はまだ見ぬ光景を幻視して嬉しそうな表情をしていた。その横顔にヒロユキは肺腑を衝かれた。

ヒロユキは、感極まって、向日葵を抱き締めた。

「え？ なに」

ヒロユキの突飛な行動に戸惑ったものの、向日葵は逆にヒロユキを抱擁した。その刹那の向日葵は、母なるものを体現していた。

その小学校の外壁は痛んでいた。校舎の彼方に山脈が疾っている。山脈の手前に都市と思しき集落が存在しているが、全体的に建物の丈は低く色彩も乏しい。ありふれた地方都市だった。

「2-1」とプレートに掲げられた教室

に、娘はいた。低学年とあって、休み時間じゃなくても教室が静まり返ることはない。背の低い娘は、教壇よりの席を与えられていた。児童たちは三々五々塊になってじゃれあっているが娘はぽつんと座っていた。ふと席を立ち、廊下へ出た。蛇口の横列に近寄って、水を呑んだ。埃の匂いを嗅いだ。廊下の冷気が全身を舐めた。

教室へ戻ると、程なくして、担任が現れた。新人の女担任はイノセントだった。給食費が未納であることを人前で指摘され、内気な少女は口ごもり俯いた。女教師のきよとんとした表情が心底憎かった。

帰宅しても、誰もいない。映りの悪いテレビを観るともなく観てありあまる暇を潰そうと試みるが長続きはしない。隙間風が入ってくる老朽化した安普請だ。裸電球の色味が寂寥感を醸し、黴のこびりついた炊事場が暮らしの惨めさを強調していた。破れた襖、煤けた窓、擦ると削れる繊維壁、

ささくれだった畳、

台所に背が届かなくてもどかしそうにしている。じぶんの頭部ほどもある釜を何とか持ち上げて洗い場に置き、紅葉のようなちいさな手で米を研ぐ。頭上の窓が灰色に染まっただけで俄に心細くなった。靴音が家屋の傍を通る度に一喜一憂した。数え切れないほど読み返した絵本は手垢に塗れ古びていた。『キツネのパンやさん』だ。

母が帰ってきた。買い物袋を提げている。

「おかえりなさい」

「ただいま」

疲れに強ばった笑みは痛ましかったが、娘はそれを看過した。

母子家庭だった。父は二年前に他界していた。身寄りのない母は女手一つで娘を養育していたが、生活は楽ではなかった。

薄暗い台所と母の孤影が、娘は堪らなく厭だった。

配膳が済み、母子は食卓囲んだが、粗末な

食事は、美味でもなくて、空腹を紛らせる効果しかなかった。

中学校に上がると、俄に環境が一変した。均質圧に戸惑いながらも過ごしたが、ついていけなかった。自ずと行き場のない子供たちが集い屈辱凌ぎに興じた。窃盗・恐喝・暴行・薬物とチープスリルと戯れた。

娘は仲間のうちの一人と懇ろになった。幾つか年上のブルーカラーだった。初めてのときは、痛みに半狂乱になり泣き叫んだ。だが、男は遂行し、完遂した。それでも人肌の温もりの虜になった。彼の本性は見え透っていた。だが、娘は孤立の方を恐れた。

妊娠が発覚し、口さがない連中によつて、アナウンスされた。相談を持ちかけると、彼は娘に暴力で応えた。

一人で病院へ行き、手術を受けた。費用

は売春でつくった。

やがて、一六歳になる年の春が訪れた。身の振り方は未定だった。

ヒロユキの額には血管が浮かびあがって汗が噴きだしていた。廃材はひっきりなしに排出され幾ら運べども果てしないようにおもえた。重量のあるコンクリート塊や細長い鉄筋の束を階下まで運搬する作業だ。軍手はすぐに使い物にならなくなった。昼食も躰が受け付けなかった。

陽が暮れて漸く解放されると、ヒロユキは、その足で向日葵が囚われている地の底に向かった。剥きだしの欲望の集積が猛威を振るう街は、今夜も糜爛していて、その腐臭で噎せ返るようだった。

着飾ったホストやホステスや風俗嬢と思しき女が門番のような役割を果たしていて、獲物を涉猟している。連れ立って歩くノータイ

の男たちは地回りだろう。路傍に浮浪者たちが屯している。舗道を挟んでその対岸に広場があり、待ち合わせらしい人々やアコースティック・ギターを掻き鳴らす者が混在している。

向日葵の姿態をイメージすると、一日の疲れが和らいだ。毒々しいネオンサインも痛に障らなかつた。見知らぬ者たちの浮かれた歓声や嬌声も祝福できるような気がした。自ずと歩調が早まっていた。

階段を降り、地の底へ至る。

例によって向日葵は歓迎する態度を見せたが仄かな違和感を覚えた。ヒロユキは、気のせいだと気を取り直し、向日葵を抱き寄せた。須臾、向日葵は躰を硬直させた。だが、すぐに力を抜いた。

ヒロユキから唇を塞ぎ、舌を挿し入れた。躊躇っていた向日葵もそれに応えた。狭いシートで向日葵の肉体を貪っているうちに再会を果たした際にヒロユキの抱いた

違和感は氷解していた。

惨めな逢瀬はやはり向日葵の献身によってヒロユキの飢えが充たされる場面が佳境だった。卓上におしぼりが山と積まれている。向日葵が手探りで何本かのおしぼりを掴み取る。

「気持ちよかった？」

ヒロユキは、ちいさく頷いた。

後始末を済ませると、向日葵が戻ってきた。

「お待たせ」

ヒロユキの隣に滑り込んだ。ヒロユキは喫っていた煙草を消すと向日葵の貌を直視し、再び、接吻けた。唇を離し、ぽつりぽつりと話をしているうちにヒロユキは氷解した筈の違和感が頭を擡げてきているのに気づいた。

向日葵は無理をしているふうだった。平静を装ってはいるがどこことなく調子外れだった。ふと他所に向けた視線を向日葵に戻して

ヒロユキは愕然とした。向日葵の頬を滂沱と泪が伝っていた。

どうした？

ヒロユキは、向日葵の両肩を支えた。向日葵の肩は、力を込めると毀れそうなくらいに華奢だった。

ややあつて、向日葵は今にも消え入りそうな声を喉の奥から振り絞った。

「お母さんが死んじゃったの……」

雨が降りだした。アスファルトやコンクリートにうつすらと積もっていた埃の匂いがした。人々の下卑た欲望によって産み落とされ、それを餌に傍若無人に振る舞い続ける街をヒロユキは蹠踉と彷徨っていた。濡れたアスファルトをネオンサインの原色が染めあげる。通行していた人々はおしなべて天の悪戯に苦笑混じりに小走りになったが、ヒロユキはそれに与しなかった。

都会の酸っぱい雨がヒロユキを濡らしてゆく。傘によって視界が悪くなっているにも関わらずに携帯電話を気にしていたホストがヒロユキと離合する際にぶつかかった。

「おいテメー」

七五三のような服装のホストが息巻く。ヒロユキはのろのろとホストを見遣った。

「なんだよその眼はよ」

ホストが手を伸ばすが早いか、ヒロユキの拳がホストの鳩尾にめり込んだ。心臓がひしゃげ、息が詰まる。ホストは堪らずに膝か

ら崩れ落ちる。間髪を入れず、蹴りがホストの顔面を捉えた。血飛沫がホストの真っ白なスーツに降りかかった。

居合わせた女が悲鳴をあげる。その悲鳴に、ヒロユキは我に返り、アスファルトを蹴った。

ヒロユキの水を切る靴音が雑踏を縫ってゆく。とにかく遠くまで趨った。足腰が悲鳴をあげようが心臓が早鐘を打ち鳴らそうが、遠離ることを心掛けた。やがて、雨露を凌げる場所に至った。

ガードを潜る天井の低いトンネルだった。貧弱な蛍光灯がちらついている。壁は落書きがひしめきあっている。排水溝に汚水が澱んでいて饅えた匂いがする。人通りは皆無に等しい。

ヒロユキは、壁を背中を預けると、そのまま、地べたに座り込んだ。呼吸の乱れも心拍数もなかなか収まらなかった。ずぶ濡れだった。前髪が目許に貼りつき煩わし



かった。足は強張りはじめていた。

煙草を喫おうと思いつき、ポケットをまさぐった。探り当てて、一本抜き取ろうとしたが、濡れていて途中で真つ二つになった。舌打ちして、箱ごと棄てた。

ふと鼻先に火の点いた煙草を差し出された。

「やるよ」

見知らぬ男だった。歳の頃は、ヒロユキと同じくらいか。ヒロユキは、差し出された煙草をひったくった。

男は新しい煙草に火を点けた。

「仕事、しないか」

ヒロユキは、応えなかった。

「その気になったら連絡くれ」

応えないヒロユキを余所に、男は紙切れをヒロユキのジャンパーのポケットに突っ込むと、煙草を棄てた。立ち去ろうとした男だが、何かに気づいて、立ち止まった。

「ほらよ」

煙草の箱をヒロユキにトスすると、今度こそ、男は雨に煙る街へ消えていった。

第 二 楽 章

あの夜、ささやかなユメさえ潰えた。

カフェ跡。

込み入った話のさなかにありながら、シュンは携帯電話のディスプレイを覗いている。尤も端正な貌だちながら酷薄そうなフレームノイアもノートパソコンのディスプレイから眼を離そうとせずにいる。仲谷とリサは意に介さない。注意力が持続しない富士は例によつて貧乏揺すりをしている。

「按配はどうだ」

議長役を務める仲谷は粘り強く議事を進行させていた。

「問題ない」

フレームノイアはディスプレイを凝視したまま応えた。回答は以上だった。

富士は、遅々とした議事に堪えられないことを隠そうともせず、これ見よがしに頭を掻きむしる。

「で、面子は」

シュンは心此処に在らずといった体で受信メールを読んで頬を緩めていて、仲谷の問い

かけを認識しなかった。だが仲谷はなかなか問いかけを繰り返そうとしない。平静に座に発生した沈黙を受け止めている。フレームノイアのタッチタイプ音が俄に引き立つ。

「おい」

声を荒らげたのは仲谷ではなく富士だった。騒音の被害者はシュンではなくフレームノイアだった。

「うるさい」

「あん」

富士の手が伸びる。フレームノイアはブロックを試みる。

やめろ

仲谷の一喝と睥睨が小競り合いを防いだ。富士は閥が悪そうにフレームノイアの胸ぐらを解放した。

「喧嘩はよそうよ」

戯けた口調でシュンが云い放った。シュン以外の全員が内心閉口したが、咎めだて

は控えた。

「面子は」

シユンは笑顔になった。まるで幼児のように屈託のない笑顔だ。

「ドントウオーリー、ドントウオーリー、おれ頑張っちゃったからさ、数日中に葱背負った鴨がわんさか押し掛けてくるって」

「いまレスがあるのは何人？」

リサが訊いた。またしてもシユンは悪戯っぽい笑みを浮かべて勿体つけた。

「聴いて愕くぞー。……なんとまだゼロ」

座に震動が疾った。仲谷は福士の感情の発露を視線で牽制してから、徐にシユンを直視した。

「だいじょうぶだよな」

仲谷は努めて感情を除去した口調で念を押した。但し、眼は笑っていないかった。

「たぶんね。もういいよね。ジェニーがお待ちかねなんだ」

応えを待たずに、シユンは携帯電話に関心

を戻した。

「福士は」

「もうあがってら。他のヤツのカヴァーに回れるぜ」

仲谷はロックグラスを傾けた。そして口を開いた。

「俺はイーシャンテンってところか。次は明後日でいいか」

「えー、明後日」

シユンだった。仲谷がシユンを見遣る。「つてウソぴよーん」

仲谷は何とか自制した。

「明後日でいいか」

全員、頷きや目配せによって、意思表示を行った。

これで散会だった。そして誰もいなくなった。

雲海の底で毒々しい彩りを放つ東洋一と

も謳われる歓楽街はこの夜も賑々しい。ネオンサインが繁茂した城壁が彼方まで伸びている。ネオンサインの繁茂は眼をやられそうだ。クルーザー程度の船舶が離合する分には問題がなさそうな幅の車道をヘッドライトとテールランプが埋め尽くしている。車輛の量は昼夜を分かたない。歩道の所々に人集りができていてそれが混雑を助長しているものの、やはり絶対数が多い。日付が変わり電車が終わっても、目立って人の姿が減るということはなかった。

渋滞が緩和される兆しはない。信号が変わる。相当数の車輛が交差点を通過したものの、渋滞全体にとっては焼け石に水のようなものだった。車列が堰き止められると、夥しい数の脚が錯綜し目まぐるしい。半数がアルコールを摂取していて、興に乗った様子話し声や笑い声や嬌声が彼方此方で聴かれた。街の幹線を高架が区切っている。高架の此岸と彼岸とを繋ぐ地下道は、幅が狭くて天井

が低く薄暗い。酒の匂いと吐瀉物の放つ胃酸の匂いとアンモニアの匂いが唾みあい、居座っていた。

吸い殻の散乱した地下道の途中に、ヒロユキが佇んでいる。呑んではいけないようだ。佇まいに硬さが窺える。壁に凭れているため、視界を人影が過ぎるが、努めて眼を合わせないようにしている。

「よっ」

肩を叩かれ振り向く。曖昧だった記憶と大枠に於いて合致した。シュンが現れた。

ヒロユキは適切な態度を思いつかずごちない目配せで応じた。シュンはヒロユキの強張りに構わなかった。

「クルマだから」

シュンはさっさと歩きだした。戸惑いながら、ヒロユキはついていった。

路肩に停まったアルファロメオにはドライブアーが乗っていた。シュンとヒロユキは後部座席に乗り込んだ。ドライブアーは

バックミラー越しにヒロユキを一瞥すると車を発進させた。

「いる？」

シュンがすすめたのはジョイントだった。ヒロユキはすすめられるままに一本貫った。ダンヒルの火が差しだされた。時折、思いついたように他愛のない会話を交わすくらいで、移動中はその程度に終始した。

どこをどう走ったのか、田舎者のヒロユキには皆目見当がつかなかった。ただ、車窓を東京タワーの脚の部分が横切ったのを視認しただけだった。

薄暗い路地に着いた。細く曲がりくねった坂道の途中だった。ドライヴァーがエンジンを停めた。車に乗っていた三者は路地に入り、閉ざされたシャッターを潜った。そこはシュンたちが謀議を重ねる空間だった。

「本日のゲストだよ」

シュンがアナウンスした。だが、だだっ広い空間の一隅に陣取っていた連中の反応は芳

しくなかった。

訝りながらヒロユキはソファにかけた。さっとロックグラスが供された。

富士と眼が合った。著しく非対称の貌に、坐りの悪さを覚えた。弁髪の女は手の甲に盛った粉末を一心にスニッフしている。ノートパソコンを操作するフレームノイアは、一切、関心を寄せなかった。仲谷は上目遣いにヒロユキを睨めていた。

容赦のない洗礼に翻弄されているヒロユキの隣にシュンが座った。

「解ってるよな」

仲谷だった。

ヒロユキは、気圧されながらも、頷いてみせた。

「もうお前は乗ったんだよ」

仲谷の視線は先鋭的でノルアドレナリンの分泌を促した。俄に喉の乾きを覚えたがヒロユキはグラスに手を伸ばすことができなかった。

帰り際に月収の半分程度の現金を渡された。「お小遣い。端金でもないよりあった方がいいでしょ」

シュンの富裕さを察し、ヒロユキは蹠踉たる心持ちになった。

じめじめした四畳半一間に敷きっぱなしの布団に疲弊した躰を横たえ、息を潜めていた。築三十年を優に越える木造アパートは震度三でもかなり揺れる。酒瓶が転がり灰皿代わりの空き缶の口から吸い殻が突き出ている。呑めない酒を呷り、考えることを放棄し、ブラウン管の裡の輪姦を観るともなく観ている。みるからにおつむの軽そうな女が平手打ちされながらマワされている。イヤホンをしていないから半狂乱の女の叫喚は届かず、間が抜けている。刺青の浅黒い肌の男は口許にその嗜虐性の証左のような笑みを貼りつけて女の器官を利用している。

仲谷の峻烈な眼つきが網膜に灼きついていた。有無を云わせぬ口調で発された言葉の端々が鼓膜に蘇った。シュンのつかみどころのなさも空恐ろしかった。そして、アルファロメオとヒロユキにとっては大金である金銭に撲たれ、胸が腫れていた。

次の煙草を取りだそうとしてさつき喫ったのが最後の一本だったことを思いだした。酒も底を衝いた。独り、毒づいてみせてから、ジーンズに脚を通した。

ヒロユキを除け者にして人々が奢侈に耽っていることに端を発した憤怒は、燐寸の火のように緩慢にはあるが着実にヒロユキの裡を焦がしながらその勢力を拡大していった。いつか信号の変わり目が合図だとすっかり思い込んでいた。

ナイフを振るう。第一の被害者である小太りの年増女は傷口の生暖かさに首筋に手を遣り掌が朱に染まっているのを認めて、

金切り声を上げた。身を翻し、スーツが板に付いていない生真面目だが出世しそうにない同年代の若者の腹部を衝き刺した。腹部を刺された健気な若者は栓を抜かれたビニール人形のように腰を抜かした。

事ここに到り、ヒロユキの周辺に位置していた人々が後ずさりし円形のステージが形成された。歩道に敷き詰められたタイルにみるみるうちに赤黒い染みが拡がってゆく。ヒロユキは肩で息をしながら暗澹たる形相で辺りを見回し次の獲物を物色した。

凝ったデザインの眼鏡をした若者がいた。手を伸ばし、栗色の髪を掴んで引っ張る。若者の上体が傾ぐ。柄をこめかみに打ちつける。と若者は活きのよい魚のように暴れ、髪を掴んでいた手を振り解いた。上段から振り下ろすと、若者のプレーンなデザインの服に斜線が引かれた。斜線は忽ちにして深紅の襷に化け、若者は卒倒し四肢を痙攣させた。

リュックサックを背負った人畜無害を体現

する青年が気に障り、片耳を斬りおとした。凶行を制止しようとする果敢な中年が現れた。遮二無二暴れてそれをはね除けてから、両手で得物を固定して、地面を蹴った。見栄を切った歌舞伎役者はゆっくりと沈んでいった。

俯瞰すると壮観だった。ヒロユキの孤軍奮闘によって圧倒的な群衆が混乱に陥っているのだ。号砲のように電車通過の轟音が駆け抜けてゆく。返り血をたっぷりと浴びたヒロユキの行く手に花道が急造される。衆目を意識し、ヒロユキは立ち止まる。さながらソロパートに差し掛かった際のギタリストのように。つと得物を持ち替え、切っ先を自分に向けた。周囲を見回し、ファンの注目が集まっていることを確かめた。そして、喉許を狙った。

我に帰った。見慣れた、平穏な街の風景がヒロユキを取り囲んでいた。街の風景はのどかでさえあった。シャツの背中が汗で



びっしり濡れていた。妙に生々しいイメージを払拭できないまま、ヒロユキは歩きはじめた。

向日葵がスリッパ一枚でソファに座っている。心ここにあらずといった体だ。俯いていて、視線は机上の一点に固定しているが、焦点は合っていない。控え室にもフロアでかかっている軽快な和製ポップスが筒抜けだが、向日葵の鼓膜を震わせてはいなかった。つと和製ポップスが控え室に雪崩れ込んできた。

「向日葵さん、お願いします」

向日葵は微動だにしない。

「向日葵さん」

ボーイが語気を強めると、のろのろと振り向いた。ボーイは身振り手振りを交え、出番の旨を伝えた。小振りなバッグを携えて、向日葵は席を立った。

原色の照明が飛び交うなかを、ボックスシートを目指す。ボックスの仕切は低く、フロアの一隅に立てば全貌を見渡せる。

ボックスの彩なす格子に何組もの男女の秘め事が詰まっていた。一面刺青の背中が、客の股間に潜り込んでいる。客の頸にしがみつき舌を絡めている女もいれば、乳房を差しだし弄ぶことを赦している女もいた。向日葵は体液の生臭さを嗅ぎとった。不調の徴候だった。

エスコートしているボーイの背中が停まった。向日葵も条件反射でそれに倣った。

「向日葵さんです」

ボックスに座った客に挨拶をして、隣に立った。向日葵も客もボーイが踵を返して立ち去るのを待った。

「長いの」

「え？」

「( )」

やっと向日葵は問いを理解した。

「はい。もうすぐ三年です」

「ふーん」

客は芝居がかった相槌を打って独りでに何やら頷いてみせた。

それきり、会話が途切れた。和製ポップスが耳障りでさえあった。向日葵は、不安を覚えた。それを回避するために、客に寄り添った。

「失礼します」

ベルトに手を掛けた。

向日葵は一心に口唇による愛撫を続けた。

続けるにつれ、頸も顎も感覚がなくなっていくが構わなかった。熱を持った吐息が項に吹きつけ、やがて、果てた。口腔に迸り、えづく。余さずに搾りとると、口を離し、おしぼりで覆った。

後始末をして、一息つくくと、さっきまでの熱狂が嘘のようにおもえた。

もうメインディッシュは平らげられた。

あとは余録で、波瀾は考えられなかった。

ロスタイムまで、会話は途切れがちだった。醜態を晒した客とはしたくないことをした女だけに、ぎこちなかった。

ロスタイムに突入し、ワンセット終了が目前に迫った頃だった。

「なんでこんな仕事してるの」

ふと棺に横たわっていた母の死に顔が脳裡に弾けた。

手で口許を覆い、嗚咽を抑え込もうとした。だが、大粒の泪が零れ、ミュール履きの足の甲に落ちた。

血相を変えてボーイが駆けつける。

「どうしました」

客は狼狽して、ボーイに対して大げさにかぶりを振る。

向日葵は客に躡り寄り寄ろうとするボーイを制し控え室に駆け込んだ。

「向日葵さん、今日はあがってください」

「だいじょうぶです」

「眼が腫れてる。そんな貌で接客されても店としても困る」

丸め込まれ、向日葵は恐縮して早退した。

向日葵の悄然たる後ろ姿を見送ったのは、マネージャーとボーイだった。

「もうあいつも賞味期限かな」

マネージャーの感情の籠もっていない声に、ボーイはおもわずマネージャーの横顔を盗み見した。マネージャーの貌に感情は見当たらなかった。

どこからともなく鳴き声が聴こえてくる。

音源を探る。聴こえていたのは、鳴き声ではなく、嬌声だった。

女の長い脚が荷重と拮抗しているのが見て取れる。皮を剥かれた鹿の脚を辿ると、脂肪が少ない躰つきをしていることが判った。女

の華奢な腰を抱え、不規則な律動に励んでいるのは、仲谷だった。暴々しく打ちつける。肉塊にしか見えない女の背部やあられない痴態が癪に障った。女の背中は、一面、刺青が彫られていた。汗に濡れ、刺青が艶を帯びている。女が身をくねらせるにつれ、女の背に棲む龍が妖しく蠢いた。

解き放たれ、髪を振り乱して愉悦に耽溺しているのは、リサだった。我を忘れた表情で、寄せては返す快感に酔い痴れていた。小振りだが形のよい乳房が揺れる。突起は尋常でなくくらいに尖っていた。手加減せずに揉みしだかれ、素っ頓狂な声で鳴く。口角から涎を垂らしてさえた。

不意に仲谷が律動を止めた。だが、リサからは離れなかった。訝るゆとりもないリサは、猛攻が途切れて却って助かった。躰が渴望していた酸素をこれ幸いと摂取した。軽やかな金属音がした。ライターを点ける音だった。仲谷は煙草に火を点ける

と、煙草の箱とライターを辺りに放ると、徐に律動を再開した。一旦静寂を取り戻した空間だったが、またもや喧しい鳴き声が猖獗を極めた。

仲谷は実に冷やややかに溺れるリサを観察していた。それは研究者が即効性の毒物を与えたラットが死になぶり殺しにされるのを観察している様に似ていた。

仲谷とリサは途中で何度か躰の位置を変え、行為はやはり牡が一方的に終端を決めた。リサはそれを予感した。

「ぶちまけてください」

息を切らしているせいで発語は分節化されていたが、確かに懇願した。

仲谷は応えを明らかにしないまま、リサの器官の裡で果てた。最後の一滴を絞り出すや、俄にリサを突き放す。腑抜けになったリサは、されるがままだった。

ロックグラスの氷塊は融けきってなかった。バーボンを注ぎ、呷る。そして、煙草を

銜えた。

「シユンはどうだ？」

夢見心地のリサは上の空だった。

「シユンはちゃんと面倒見てるんだろうな」

「だいじょうぶ」

行為の余韻にどっぷりと浸ったまま、リサは応えた。

「うまく飼い慣らせてる筈だから」

「全員集合の巻い」

シュンが戯けてみせたものの反応を示したのはカトリーナだけだった。不適切な発言だったことは気にせず、シュンはサーカスを眺める幼児の眼差しで、座を眺めている。奥行きのある瞳で、思惑を読みとることが難しい。

ストレンジジャーが混じった座だけに会話が弾まない。フレームノイアのノートパソコンのキーボードを叩く音が煩いくらいだ。

福士はテーブルを離れていて、ストレッチに余念がない。

リサは、手許のタブレットケースを弄んで、やり過ぎしている。

煙草を喫っている仲谷が時計に眼を遣って、素っ気なく眼を離す。

頻りにメイクを気にする明らかに日本人なのにカトリーナと名乗る金髪の女と、メタコミュニケーション能力を欠いたばかりに鳴かず飛ばずに終わった元ホストが、座に加わっ

ていた。

「カトリーナ渴いてんねんやん？」

誰にともなく告げたが、誰も取り合わなかった。すらりと背が高いが、体脂肪率は極端に低く、四肢が長い。嫌みったらしいまでのプロポーションと常にふんぞり返ったような眼つきで他者を睥睨する癖とが相俟って、恰も思い上がったシヤム猫のようだ。聴き流されただけで、俄に機嫌を悪くした。

ダウンジャケットを着た元ホストは、前髪越しに上目遣いが十八番のポーズらしい。観客のいない舞台上演じ続けている。挙措に自意識の過剰ぶりが滲みでていて、自意識の過剰ぶりにかけては、シヤム猫と五十歩百歩だ。

明らかに毛並みの異なる二人の新参者との顔合わせに、ヒロユキは気圧されっぱなしだった。シヤム猫も元ホストも異邦人に接しているかのような視線をヒロユキに向

けた。

壁に掛かったアナログ時計の長針・短針が頂点を指そうとしていた。

福士が抱きかかえて持ってきた麻袋をひっくり返しテーブルに携帯電話をばらまいた。

仲谷がヒロユキらに視線を向ける。

「好きなの持っていけ」

どの携帯電話にも、番号が刻印されたラベルが貼られている。

「カトリーナこんなダサイ携帯いややねんか」

福士が痙攣を起こす徴候をみせたが、先に仲谷が窘めた。

「勘違いするな。無線代わりだ」

落ち着いた口調だが、静かなる怒気を孕んでいた。カトリーナの貌から、弛緩が消え失せた。

「これ、プリペイド？そーいやダチが路上売りしてたな」

元ホストは、手にとった携帯電話を矯めつ眇めつ睨め回す。

「今度プリペイド要るときはおれに云つてよ」

元ホストの言葉に唐突さを感じたのか、メンバーは一拍だけ無反応だった。

シュンが吹き出す。

「そうね」

リサがシュンの笑いを打ち消した。

ヒロユキは、テーブルに伸びる手が減つたのを見計らってから、一台を手にした。

一等地にある学習塾は、宣伝費をじゃぶじゃぶと費やした甲斐あって、繁盛していた。

学業しかできない人間の末路を体現する講師は、己の価値を支えるために躍起になってスペックやポテンシャルの値打ちを説く。真に受けているふりをしている子供たちだが、その実、いかにも脆弱そうなか細い頸筋の講師を衝き放し、斬り棄てていた。

云わずもがなだが、中学生が集まっている。子供染みた思いい上がりで充ちた貌が並ぶ。空間は育ちのいい子女だけが醸す乳臭さに充ちている。膨大な情報に晒され予め幻想を剥奪されているにも関わらず、未来を選べと迫られる経済大国の子供たちは早くも老成のプロセスに差し掛かっている。

白けた教室に、娘の姿があった。逐一黒板を目視し、せつせとノートにシャープペンを走らせている。腺病質に真っ直ぐな黒髪という取り合わせが生身の人間らしくなかったし、まだ中性的な躰つきが痛々しい印象を

与えた。

ファーストフード店のスクリーンガラスに面した席から学習塾が覗く。サンダラスをしたリサが、煙草を喫いながら、窓の向こうを観るともなく観ている。

学習塾は九十分二時限制で、二時限目が終わるまで三十分を切った。ライダーズジャケットのリサは、おもむろに煙草と火を仕舞って席を立った。

店員の挨拶を背中で聴いて、サンダラスを外す。一片の情も検知できない双眸の放つ視線が虚空を鋭く穿つ。交互に手を解しながら、街灯の死角に紛れた。

「仕掛けて」

通話相手はそれだけ云って一方的に通話を打ち切った。ドライヴァーは、サイドブレーキを解除し、アイドル状態だったトレーラーを発進させた。

「キックオフだ」

発車と前後して、ドライヴァーが同乗者に報せた。

真新しい高層建築が密集した界限だった。

間近では一望だにできないモニメントが丈比べをする麓を走行するトレーラーは、巨大な型にも関わらず、遠目には玩具のようにみえた。

ドライヴァーが道順を諳んじていたらしく、トレーラーは一切逡巡せずに、ある地点で減速した。一見、一等のオフィスビルと見紛うようなスケールのビルディングは、実はマンションだった。エントランス前に駐車場があるがそこは来客用に設けられたもので、居住者向けの駐車場は地下に潜っていた。トレーラーは地下駐車場に到るスロープの途中で、停車した。

同乗者二名はドライヴァーの目配せを承けるとコックピットから降りた。コックピットを降りた二名は、トレーラーのリアに回り込

んだ。コンテナの門を引き抜き、観音開きの扉を開け放つ。片割れが荷台に飛び乗る。二人掛かりでレールを設置した。

母娘の乗ったセダンのウインカーが点滅した。フレームノイアは、スロットルを緩め、エンジンプレーキによって、相対速度を保った。セダンが左折する。セダンに倣って、タンデムにも関わらずにフレームノイアは車体を傾けた。

大通りを離れると、俄に光量が減った。フレームノイアの駆る二輪のヘッドライトがセダンのリアガラスを穿つ。

やがて、セダンは自宅マンション付近に到った。

セダンがスロープに進入した。

スロープをトレーラーが塞いでいる。業者だろう。人影がちらつく。母は、クラクションを鳴らした。だが、乗員らしき人影



は悠然と構えたままだ。後続の車輛が現れた。堪らずに、シートベルトをかいぐり、抗議に出向こうとドアを開けた。

人影が横から割り込んできた。反応できなかった。頭部に金属塊を宛われ、その冷たさが即座に伝わってきた。

刺客は、母をポイントしたまま、後部座席に乗り込んだ。

「このまま、コンテナに車を載せろ」

母は動転してまごついている。

「急げ」

きつい口調に弾かれ、母は、セダンを前進させた。

セダンがコンテナに収まると、屯していた二人の乗員が俄に豹変した。きびきびとレーンを仕舞い、扉を閉め、小走りにコックピットへ帰還した。乗員が助手席のドアを閉めるが早いかドライヴァーは、ギアをバックに入れた。

トレーラーが後退しはじめるかはじめぬか

のうちに、バイクは車体を翻し、現場を走り去った。

「携帯、使えねえからな」

母娘は、示し合わせたかのように、同時に、刺客の貌をみた。

「コンテナの内側に劇場なんかで使う防護シールド張ってあるからよ」

みるみるうちに、母娘の貌が曇っていた。

「携帯、預かつとくか」

母娘は抵抗しなかった。

母娘をセダンごと搭載したトレーラーが巨大な車体をくねらせて、高速へ続くレーンに滑り込んだ。強引なライディングに対して非難のクラクションが複数飛び交ったがどこ吹く風だった。

「電話しろ」

ドライヴァーが誰にもなく指示した。

カトリーナもホスト崩れも意図を掴めずに視線を交わした。

「携帯貰っただろう。そいつで連絡しろつつってんだよ。『高速乗る』ってよ」

居丈高な口振りにあからさまに索然とした表情を覗かせつつもカトリーナが電話を掛けた。

呼び出しを始めると直ぐに繋がった。だが、無声だった。ややあって、カトリーナは携帯電話越しの息遣いを聴いた。ドライヴァーに視線で指示を仰ぐと、ドライヴァーが喋るように促す仕草をした。

「うちらやねんけど、いまから高速乗るよつて」

「もう入口に差し掛かっているということか？」

か細く明澄な音質の声が問うた。

「せや」

「了解」

それきり、通話を打ち切られた。不快感を

顕わにしてカトリーナは携帯電話を睨みつけた。視界一杯にゲートの横列が展がり、闇を祓わんとする照明の群れが眩かった。

母娘は暗がりの奥に閉じ込められ心細さに身を寄せ合っている。母も娘も生殺与奪の権を奪われたことに不安の色を隠せなかつた。心なしか、賊側の面々も何とも煮え切らない表情をしていた。

コンテナの扉を開くや、排気ガスの残り香を嗅いだ。後部座席に陣取っていた富士は、リアガラス越しに仲間と目配せを交わした。

「降りろ」

促され、母娘は、のろのろとドアを開けた。すかさず、黒づくめの二人が運転席・助手席のドアの傍に駆け寄ってきて、躊躇している母娘を車外に引きずり出し、コンテナから降ろした。

暴漢から逃れようと母娘は藻掻く。悲鳴や靴が地面を削る音がプラットホームらしき空間に銜する。中学生の娘は非力で労せずには制圧できなかった。どちらかといえば、母の方が厄介だった。恐慌状態に陥り死に物狂いの抵抗をみせた。賊が手を伸ばし腕を取ろうとするのと、振り解かれる。抱きつくくと、身を振って、抜け出した。黒の濃淡により、辛うじて、闇と二つの人影が識別できる。

女一人に手こずっているホスト崩れを見かね、カトリーナが痺れを切らした。

「ピストル貸して」

カトリーナの劍幕に気圧され、従った。拳銃を受け取るやカトリーナは迅速に構えた。

おばはん、おいたはそれくらいにしとき。

脱兎も狩人もカトリーナを観て愕きに撃ち抜かれた。

銃口が娘の口にねじ込まれていた。  
神妙にせな、ほんまハジくから。

憤怒を漲らせていた母だが、他に手段がないことを悟り、構えを崩した。カトリーナの打った銛によって獲物が俄に活性を喪ったことに索然としつつもホスト崩れは作業に取り掛かった。

後ろ手に手錠を掛け、ボールギヤグバイトを噛ませ、後頭部でストラップを固定した。髪を手綱代わりにして、地面に引き倒した。それから、両足首を揃えさせ、幅の太いビニールテープで十重二十重に巻き付けた。母は、闇に塗れ、思わぬ賊の仕打ちに逐一、身をくねらせた。

主人は、三台ものディスプレイが並んだデスクに向かっていた。絶えず、いずれものディスプレイに眼を配り、それぞれ接続されたキーボードやマウスを操作している。ディスプレイには数字の羅列とグラフが映っていて、刻々と微妙に変化している。主人はそれに逐一一喜一憂している。

インタホンが鳴った。だが、主人は無視していた。ややあって、再びインタホンが鳴り、主人はやつと家人が不在だと思ひ出した。躊躇いがちに席を外し、リビングに移る。壁に作りつけのモニタの脇に掛かった受話器を引ったくり、ぞんざいに応答する。

「はい、三池ですが」

「お届け物の配達にあがりました」

ちいさなモニタに映っているユニフォームを着た人物が応えた。

「いま開けます」

通話を切りあげ、タッチパネルを操作した。

エントランスホールから主人と通信していた業者は、自動扉を潜ると、踵を返し、何やらジェスチャーを送った。すると、エントランスホールに、やはりユニフォームを着用した者が二人、現れた。二人は、逡巡することなく、エントランスホールを横切った。

玄関の扉がノックされた。主人は何ら疑いを挟まずに鍵を外した。

先頭にいた作業員は、主人が姿を見せるが早いか間合いを詰め、口許を塞ぎ、主人と三和土に連れ込んだ。あとの二人も扉を潜り、しんがりが扉を閉めた。

主人は躍起になって藻掻いている。作業員のうちの一人が器具を主人の頸筋に宛う。その作業員は主人を取り抑えている。作業員と目配せを交わし、器具を操作した。青い電流が爆ぜ、忽ちにして、主人は失神

した。

意識が戻ったとき、俄には己の置かれた状況を認識できなかった。

「お目覚めボン」

聴き覚えのない声に反応して視線を巡らせると、ユニフォームを着た見覚えのない青年の姿があった。他にも二人いたが、やはり、見知らぬ貌だった。慌てて起きあがろうとして、拘束されていることに気付いた。

主人がやっとシナリオを理解したことに、ユニフォームの三人は互いに貌を見合わせ、時機だと確かめ合った。

「もうお判りのことと存じますが、我々は盗賊です」

戯けた調子のシュンから緊張感は微塵も感じられない。だが、さつき主人を制圧したのは、シュンに他ならなかった。

「じゃん」

ジングルを真似た奇声を発し、火器を衝き

だした。

「マブです。って、至近距離ならどうでもいいけどね」

シュンの貌は吹っ切れていた。それを察して、主人は萎えた。

車輛のヘッドライトが爆ぜた。光量の落差が烈しく、瞳孔収縮が追いつかない。

ヘッドライトによって浮かびあがってきたのは、拘束された母娘だった。

「よし、映った」

ノートパソコンのディスプレイを目視していた仲谷が周囲にアナウンスした。

母娘は、どちらも、後ろ手に手枷を填められ足首をガムテープで何重にも巻いて括りつけられ、口許をやはり黒のガムテープで塞がれている。砂埃によって貌とわず着衣といわずに煤けている。一頻り涙を流し、眼を泣き腫らしている。

促され、母娘は躰をくねらせて自宅のり

ピングの映像を覗き込む。

やはり拘束された主人が映っていて、一拍あつて、主人の血相が変わつた。一拍あつたのは送受信のタイムラグだつた。母も娘も思ひの丈を吐露しようとするが、猿轡のせいで呻き声にしかならない。主人もまた然りだつた。恐慌状態に陥つた三対の眼差しが、視線を交わしても、より恐慌の度合いが悪化しただけだつた。

コマ落ちの少くない映像だが、母娘の現況を識るや、主人は侵入者たちを見回した。

「云わずもがなだけど、妙な真似したら、一家揃つて……だからね」

主人は、声の主を呪い殺さんばかりに怨嗟に充ちた眼で睨みつけた。だが、形勢が逆転することはなかった。主人の肩が陥落するまでにそう時間は掛からなかつた。

いつか稜線が光で縁取られていた。冴え冴

えとした空気に細胞が引き締まる。都内とは気温の差があり、吐息が白くなった。曇天で、空気はやや湿っている。黎明を迎え、チームの連中は、ハーフタイムの終わりが近いことを意識した。母娘は、引き続き、悪夢に閉じ込められたままだつた。

横に列んだ扉のうちのひとつが開き、廊下にシュンが現れた。程なくして、全員が廊下に集まつた。主人を取り囲むフォーメーションで、一団は廊下を進んだ。

泥の匂いと草いきれに歳月に埋もれていた記憶が蘇つた。

生まれ育つたスラムは弱い者ばかりが寄り添い傷を舐めあつて、より弱い者を血眼になつてさがしていた。袋小路が如きムラで血祭りにあげられたのは、病的なまでに自己主張のできない娘だつた。

泥酔させた娘を、同級生十人前後で、代わる代わる姦した。誰からともなく持ちあ

がった企みだった。異論を唱えることは能わなかった。閉じた共同体に於いては、臆病と卑劣は遍く連鎖していた。

欲望の対象を追い詰めいきり立つ子供たちの間に、興奮と怯懦が緋い交ぜになった整理のつかない感情が蔓延っていた。

陸に放りだされた一匹の魚が、闇の藍に塗れ、のたうっていた。衣を剥がれ、白い身が顕わになっていた。子供たちは、一方的に単調な行為を反復しては充足して、つと魚に対する関心を喪う。

同級生がひたむきに腰を振る様を眺めていると、火照りは却って冷え込んでいった。娘の啜り泣きと同級生の乱れた息遣いだけが鼓膜に届いている。他の連中は、組んず解れつする二体の肉塊を取り囲み、固唾を呑んで行為を観察している。番う雌雄の傍らに、学生靴が無造作に転がっていた。学生靴は娘のものらしく、ストラップに可愛らしいマスコット人形が結びつけられていた。マスコット人

形は持ち主の受難を愛くるしい表情のまま見据えていた。

あるかなきかの貧弱な乳房を弄び、ちいさくて心許ない突起に嚙りついた。喉元が月明かりを反射していた。律動に合わせて泥濘のような乳房が揺れる。いつか魚は刺激に対して逐一反応をしなくなっていた。感情が蒸発した瞳は洞のようだった。萎えそうになりながらもヒロユキは躍起になって昇り詰めた。引き抜き、すぐすごと後始末をした。

いまとなつては、あの晩が現かも定かでない。

一台のセダンが大通りを走行している。大通り沿いに建ち並ぶビルディングは迫りだしてきているかのような錯覚を惹起した。セダンが悠然と路肩に停まった。三対の靴がアスファルトのうえに降り立った。

まごついている主人に対し、シュンが顎をしやくった。主人は疲れ切った足取りで歩きはじめた。シュンと仲谷が同行する。行く手には、メガバンクの店舗が控えていた。天空は皮肉にも一面の蒼穹だった。南中前後の陽射しは峻烈で、エントランスの醸す陰影とのコントラストがひどく鮮明だった。肩を落とした主人が番人に挟まれて白昼の街角に出現した暗闇に吞まれてゆく。

実戦経験のないガードマンが直立不動の姿勢をとっている前を主人以下が横切り、窓口に近づく。

「いらっしやいませ。お預かりいたします」いつもの調子で伝票を受け取った窓口担当の女性行員は、額面を確かめ、傍目に判る狼狽を呈した。程なくして、奥に控えていた役つきと思しき中年の男性行員が姿を現す。

「本日はご利用ありがとうございます。是非、別室へどうぞ」

対応は打ち合わせ済みだった。

「結構だ。急ぎでね」

「そう仰らずに」

語り口から、粘着質にみえた。そこそこの暮らしにどっぷりと浸かった醜い生物に、シュンが機嫌を損ねた。

「いらねえつつつてんだろう」

怒号が喧噪を打ち消した。辺りに居合わせた人々は身を固くした。ガードマンが近づいてこようとしたのを制し、行員は蒼白になり引き下がった。ほとぼりがさめる頃に仲谷がシュンを無言で非難した。

ソファにかけて待っていると、再び、先ほどの行員が現れた。シュンと再会し、貌を強張らせた。

「失礼ですがお車でしょうか」

応えに窮し、主人は仲谷を窺う。

「そうだ」

仲谷が即答した。

「嵩張りますので通用口に用意させました。お車をお返し願いたいのですが」



「わかった」

仲谷は主人に目配せを送った。主人はそれに応え引き返しはじめた。仲谷とシュンも主人に倣った。

セダンを回すと、数人の行員が待ち構えていた。おそらくは護衛のためにかりだされたのだろう。主人が降車すると、通用口の鉄扉が開かれ、札束を積載した台車が現れた。

「おい、トランク」

仲谷がドライブアーに促す。ハッチが跳ね上がる。

数人掛かりで結構な嵩の札束をトランクに積み直すと、果たして、トランクの半分が埋まった。

一行が立ち去ろうとすると、行員が作り笑いを浮かべた。

「今後とも我が行をご贖員に」

主人は力無く笑った。仲谷が先鋭的な視線を向けているのに気付き、挨拶を切り上げ、車に戻った。

拘束された娘の上体を抱き起こす。触れるや娘が身を硬くしたのが伝わってきた。口を塞いでいたガムテープを剥がすと、あどけない唇が顕わになり、犯意が萎えそうになったが、何とか堪えた。

「呑め」

ミネラルウォーターのペットボトルの口を娘の唇に宛った。加減を誤り、口角から水が零れ、娘の顎を伝い、胸元を濡らした。ブラジャーの意匠の切れ端が透けて、ヒロユキは眼の遣り場に窮した。娘の感触は、百合のみならず、同級生たちと分け合って食った娘をも想起させた。

去来する記憶の端々を振り払い、ヒロユキは、ヒロユキを揺るがせた唇を、再びガムテープで封印した。

退屈したカトリーナが足で草を刈って無

聊を慰めている。天井の高い広々とした空間にあつては、草を擦る音さえ際立っていた。

「うるさい」

カトリーナの惹起する音が気になっていた。福士が怒鳴ると、カトリーナが柳眉を逆立てた。いかにも不服そうな態度を示したが、拗れなかった。

「まだなん？」

カトリーナが関西訛りで誰にともなく訊いた。

「そろそろ連絡があるはずだ」

「そろそろそろそろってそればかりやん」

「あん？」

カトリーナは口を噤んだ。

そのやりとりを期せずして傍観させられたヒロユキは辟易したように眼を離した。トタンの裂け目から陽光が射していて、その光の筒の裡に無数の塵が泳いでいた。茫然とそれを眺めていたヒロユキだが、つと貌を強張らせて俯いた。いつか自らが浴びたピンスポツ

トと結びついた。

主人を担いだチームは、銀行巡りをしてきた。主人のオーダーに行員一同が周章狼狽するのは一件目と同じだった。

バックミラーを介し主人はドライヴアールと眼が合った。ドライヴアールの眼に険を認め、主人は肝を冷やした。

セダンが交番前を通過したりパトカーと離合する局面もあつた。だが、そういった局面では、賊の連中が牽制を怠らなかつた。果たして、救いの手が差し延べられることはなかつた。主人の背後に控えるリアウインドウの裡でパトカーの影がみるみる縮小してゆく。賊たちは軽い危機をクリアしそれとはなしに弛緩した。

主人はかなり憔悴しているが、気丈にも、持ち堪えている。その要因は妻子だということとは相違ないだろう。自らを取り囲

む連中の素性は想像だにできない。犯行が計画的なものであり労を厭わずに下調べをしていることは理解した。財産をすられた。だが、その財は自ら汗水垂らして築いたものではない。オンライン上で繰り広げられるマネーゲームのもたらした果報だ。憑き物が落ちたような気がしたのも紛れもない事実だった。

モバイルに表示されていた箇条書きの一文一文の先頭にチェックボックスが付いていた。縦に並んだチェックボックスのいずれにもチェックが入っていた。但し、最後尾のチェックボックスを除いては。

ふと向日葵のことを思い出した。識別はできるが、容貌は茫洋としていて明確にイメージすることはできなかつた。向日葵は打ちひしがれながらも今夜も牡どもの世話をしているにちがいがいなかつた。

角のない躰や艶やかな髪の手触りを思い出した。そして、温かな口舌による愛撫を思い出した。無心に頭を揺らす向日葵は健気だった。いつか、勃起していた。ヒロユキは己に憤怒を覚え、洗面をつくった。

カトリーナは、草臥れて、大人しくなった。しゃがみ込んで、じっとしている。

ホスト崩れも似たようなもので、眠りに落ちぬようにずっとライターを弄んでいる。

ドライヴァーは腕組みをして瞑目しているが、耳を澄ましているらしく、取るに足らない物音に逐一反応し、一瞥をくれる。

ヒロユキは疲れが体内に沈殿していることを自覚し、改めて気を張る。一昼夜屋外で過ごしたただけあって全身が埃に塗れている。暇潰しに煙草に火を点ける。喫い過ぎのせいで美味くなかつた。二・三口喫っただけで棄ててブーツで揉み消した。

再三、主人を乗せたセダンが大手金融機関の主要支店前に停まった。

「それじゃ今度もよろしくお願いしますよ、名優さん」

シュンが軽口を叩く。主人の貌を険が過ぎつつあったが、それだけだった。キャスティングボードを握られた主人は大人しく降車するしかなかった。

スクリーンガラスの内側で、主人らとすっ飛んできた行員が何やら会話を交わしている。行員は食い下がったが、主人が翻意する筈もなかった。やがて主人ら三人組が行員と別れ、玄関に引き返してきた。

最敬礼の姿勢をとる杓子定規な身なりの行員らを置き去りにして、主人を乗せたセダンが発進した。この日、幾度か再現された光景だった。ほとぼりが冷めるまでは、シュンの饒舌も形を潜めた。

壮麗なビルディングが密に建ち並ぶ都市が黄昏に染まっている。脈々たる車列に混じっ

た主人を乗せた車輛の車内にも斜光が回り込み、搭乗者らを琥珀一色に染め上げている。戦意喪失した主人と未だ緊張感を絶やさない首領の対比は、捕食者と獲物の重圧の差を如実に示していた。

高速に乗れば、試合終了だ。客観的に逆転の可能性は皆無に等しい。ともすれば浮かれそうになる。だが、それが命取りになることもある。賊の面々は、肅々と待った。不審がられぬように心掛けて、待った。

インターの標識が見えた。逸る感情を意志によって抑制する。徐行速度の続く渋滞にやきもきする。何とか堪えて、ウインカーを出し、レーンに移る。スロープの勾配が座席越しに伝わってきた。

高速に入った。

「メインレースは終わったな」

賊らが相手を崩すのを主人は何の気なしに傍観していた。

奏く曲は一緒でも二度と同じ演奏はできない



とうに太陽を目視することは能わなかった。だが、その轍によって、稜線を象っている。稜線から離れるにつれ琥珀が色褪せて澄んでゆく。琥珀がすっかり透けるか透けぬかの境界から淡い藍が混じりはじめ、東の地平には漆黒と見紛うくらいに濃い藍が澱を成している。

山奥に佇む工場は、ぼつねんとしていて、ともすると、場違いという印象を与えた。逆光によって黒く塗られた建造物は、砂漠の最深部で朽ち果てた給水塔のように寂寞たるものを醸しだしている。

建物はサッカーコート一面ほどの面積を土台にしている。一階の床は舗装されており、砂利が敷かれている。等間隔で自動販売機ほどもある四角柱が立ち並んでいる。地面に置かれたもの・壁に立て掛けられたものと、パレットが散見される。塗装が剥げ、錆びつき、腐蝕したフォークリフトが一階の一角に蹲っている。

高い位置にある採光窓の羅列から陽光が供給される。ついさっきまで滂沱と供給されていた陽光は、いつか申し訳程度にまで供給量が減っている。琥珀の裡を無数の埃が泳いでいる。

ヒロユキは、腰を下ろし、待ち続けた。呼吸をする度に埃が気道を引っ掻いた。無精によって目隠しの機能さえ獲得した頭髮の奥底に眼が覗いた。視点は足許の一点に固定されていたが、ヒロユキの眼に恐らくは何も映っていない。

カトリーナはやはり絶えず落ち着きなく過ぎしていた。所在なさに堪えきれずにあちこち歩き回ってはそれに飽き、飽きてはじつとしていられずに今度は暇つぶしに踵で地面に穴を掘りはじめて富士に怒鳴りつけられるという案配だった。

中学校にもあがっていないカトリーナが夜更けの戒橋で暇を持て余していた。川面からは饅えた匂いが立ち上っていた。カト

リーナの母はシングルマザーで水商売をしていた。カトリーナは幼い頃から野放しで育てた。

小学校で誉められることは皆無に等しかった。自宅で教科書を開くどころか、宿題さえ果たしたことがなかった。目鼻立ちがくつきりとしていて、服装も華美だったので、目立ってはいた。

「ねえちゃん、待ちあわせか」

軽快な口調でカトリーナに訊いたのは大学生と思しき優男だった。爽やかな笑みを被っている。

カトリーナがかぶりを振る。

「ほな、行こか」

きよとんとしているカトリーナの手をとり、牽引しはじめた。

哭き喚いても牡は割り込んだし、やめなかつた。

ホスト崩れは、気が向いたときだけ、カトリーナの相手をした。ヒロユキに話し掛けて

も反応は梨の礫なので、さっさと話を打ち切った。転がっていた鉄パイプを振り回したり、石を遠投したりした。

学生時代、野球部に所属していた。高校時代も野球部だった。甲子園出場どころか地区予選の一回戦さえ突破できないようなチームだった。尤も、高校自体が中の下ラックの特筆すべきところのない高校だった。

就職したものの、半年と持たずに退職した。それからは職を転々とした。下積みを厭ったばかりに手に職はつかなかった。悪戯に歳を重ねたが、何者にもなれなかった。そして、求人広告の甘言を鵜呑みにして、ホストとなった。

店は、優越感に飢えた個体の溜まり場だった。優越感に飢えている点について、従業員・客の区別はなかった。誰もが敬われたがり、恐れられたがり、威張り散らしていた。ローカルな力を誇示しては悦に

入っていた。

アルコールとカネに漬かって暮らした。菓物は客の風俗嬢のご相伴に預かったのがきつかけだった。アルコールとカネにクスリが加われば、消耗のペースはより酷くなった。食いつぶぐれてはいなかったが、売れっ子でもなかった。収支の均衡が崩れるのは予め確定していた。

後ろ手に手錠を掛けられた母娘はパレットのうえで息を潜め成りゆきに身を委ねている。母は胸許に娘の頭を載せさせて、娘の体重を引き受けている。折に触れて、母は頬をすり寄せて娘を励ました。

福士は始終ノートパソコンの前に腕組みして座っていた。表情に乏しく、底知れぬ印象を与える。自ら口を開くのは指示あるいは注意を与えるときのみで、一切無駄口は叩かなかった。

福士と別働隊の交信が終わった。  
犯行メンバーたちの間を晴れやかなものが

駆け抜けた。

母娘は、貌を強張らせたものの、面はあげなかった。

さっきのシュンら別働隊からの報せは事実上の完遂宣言だった。犯行グループ側がリードを奪った。あとは、タイムアップを待つばかりだ。廃工場にいる犯行メンバーたちの緊張も緩まっていた。

「カトリーナな、ギヤラ貰うたらあれもこれもどれもそれもぎょうさん買うたるねん」

カトリーナが嬉々として独白する。その癩に障る声がからんとした空間に乱反射する。胸の前で掌と掌を組みあわせて、はしやいでいる。飛び跳ねる。その度にたわわな乳房が揺れる。

「ほんでな、ミナミ凱旋すんねんやんか。肩で風切ってな。うちは選ばれた女やねん。うちはごっつい女やねん。やっど、パンプーどもイワしてやれるねん」



誰も訊いていないのに、上気したカトリリーナは言葉を継いだ。年齢の割に、肌つやがよくなかった。それを誤魔化すためにファンデーションを塗りたくり、さながら蠟人形の肌のようになっていた。猫のような眼は形がよかったが、いつも眼つきがのっぺりとしていた。

「しんどかったな。ついてへんかったからな、いままで。せやけど、これからやねん。イワしたるんや」

カトリリーナの熱弁に、ホスト崩れが触発された。

「俺はよ、焦げつきチャラにして、絶対返り咲いてやる」

挙措の一切が芝居がかっているのだが、「芝居がかっている」域にとどまっているため、煮え切らない。それゆえに、シビアな眼を持った客を白けさせてしまうのだ。自覚はなかった。演技者としての才は見当たらなかった。

気障な所作で髪を搔きあげて、カトリリーナに対して見得を切った。ホスト崩れの宣言にカトリリーナが呼応し奇声をあげながら天に拳を衝きあげる。

「みてろ、また天下を狙う。エックスでもシヤブでも使って指名搔き集めてよ、名を成してやるぜ」

「シヤブ使う？ だっせえ」

「うるせえ」

ヒロユキは、カトリリーナ・ホスト崩れとは離れた地点に位置していた。ヒロユキは、のろのろとはしゃぐカトリリーナを見遣った。その眼は生気を喪っていた。カトリリーナやホスト崩れを蔑もうとした。だが、その筋合いがないことにすぐにつきあたり、気後れしたように、眼を伏せた。

「うちの底力みせつけたるねん。ナメとつたらあかんど。どいつもこいつもイワしたるからな」

「俺はこんなもんじゃねえぜ。本気だして

やるぜ」

いまだにカトリーナとホスト崩れは身振り手振りを交えながら交互に気炎をあげつづけていた。

ヒロユキは、蚊帳の外にとどまり、カトリーナとホスト崩れの咆吼を雑音として聴いていた。きつと聴くに堪えなかったのだろう、また、地面の一点に視点を降ろそうとした。ふと、その横顔に波紋が投げかけられた。眼を瞑り眉根を寄せて、耳を澄ました。防音の甘いスタジオだと別室の演奏を洩れ聴くことがあった。あるかなきかの唸りは、ヒロユキだけにしか聴きとれていないらしかった。

ヒロユキは辺りを見回した。やはり、ヒロユキ以外の耳には届いていないようだった。カトリーナもホスト崩れも連綿と独白を続けていたし、富士にも異状は認められなかった。ヒロユキは訝りながらも錯覚だったものとした。呼吸を整えて、シュン一行の到着を

待つのを再開しようとした。息をふかく吸い込む。冷気が肺を凍てつかせようと斬りつけてくる。

やっと呼吸が整った頃だった。

唸りは俄に肉薄し、擬態を脱ぎ棄てた。

耳障りだった。

肉薄してきたのはサイレンで、警察車輛のそれだった。

「パトやん」

「マジかよ」

犯行グループの誰もが泡を喰って、その場を凌ごうとした。

覆面パトカーが車体を横滑りさせながら停車した。砂煙が舞い、ヘッドライトと赤色灯を乱反射させた。一台のみならず、二台、三台と警察車輛が到着した。二台目と三台目は覆面パトカーではないパトカーだった。一頻りすると、五指に余る警察車輛が集まっていた。

停車した車輛から警察官が躍りでてきて

は駆けだした。

ヒロユキ・カトリーナ・ホスト崩れは、富士に縫りつくような視線を向けた。だが、富士とて、ヒロユキたちの鏡像を演ずるしか能わなかった。

番人たちが雪崩れ込んできた。ヒロユキたちは意味を成さない叫喚を発するが、番人たちの靴音や怒号がそれを掻き消した。

ヒロユキたちに対して、幾つもの銃口が衝きつけられた。

トラメガが喚く。

全員、動くな。

追う者の警告は、恐慌状態に陥った追われる者どもの鼓膜を震わさなかった。カトリーナもホスト崩れも逃げ惑っていた。

とまれ。

ヒロユキは絶叫しようとした。だが、喉が干上がっていて、声にならなかった。

場違いながらカトリーナは軽快なストライドを披露した。頻りに背後を気にしながら、

警官隊から遠離れた。小振りだが形のよい乳房が縦に揺れる。華奢な四肢は透くほどに白かった。

ホスト崩れも火の点いた形相で脚を纏れさせてつんのめりながらも逃げようとしていた。酒浸りの日々が肉体から切れを奪っていた。捕食者に遭遇したら、群れで行動していても真っ先に狩られる衰弱した被食者のようだった。

撃て。

轟音が爆ぜた。

一斉に放たれた灼けた矢の群れがカトリーナを背後から射止めた。

前後して、ホスト崩れも被弾した。ホスト崩れの方は運悪く項を撃ち抜かれて即死だった。

立て続けに二体の肉体が弾雨によって檻籠に転じたのを見届けて振り返ったヒロユキの眼つきに怯懦が作用した。多勢の制服警官が喊声をあげながら、ヒロユキの方へ

猛然と駆け寄ってきていた。

逃げようとしたが能わなかった。

無防備なヒロユキに警官どもが我先に飛び掛かる。肉や骨がぶつかる籠もった音とともに、押し倒される。砂利が鳴る。砂煙が舞う。埃の匂いを嗅がされる。擲られ、蹴られる。抑え込まれて、胸郭が圧迫される。胸郭が圧迫されているせいで声もだせない。息が詰まる。胸座を掴まれ、押し込まれる。砂利を敷いていて痛い。

ヒロユキは地べたに一方の側頭を押しつけられた。逆手を取られて貌を歪ませた。明後日の方向にねじ曲げられたヒロユキの手頸に手錠が填められた。重厚な金属音は、シールドを抜き差しするそれと似ていた。

ヒロユキは糸を断たれた操り人形のように項垂れた。

そこで、我に返った。

胸騒ぎを意志を以てねじ伏せようと試みるも果たせずに悪戯に時間を浪費してしまっ

た。

本当にシユンたちは現れるのか。

ヒロユキは、福士を盗み見した。件の報告を受けても、福士は、やはり気のない様子で、じっと待っている。ヒロユキの視線に気づいたのか、福士がヒロユキに一瞥をくれた。須臾、両者の視線がぶつかった。ヒロユキは、努めてさりげなく視線を外した。

どうやら、福士の不審を買うのは免れたようだった。

起伏のある道程を経て、やっと目指す地点がフロントグラスの奥にアトミックな粒子として現れた。暗がりには潜んだシユンらは表情がなかった。

仲谷だけが渋面だった。只ならぬ気迫を辺りに発散させていた。

「長いドライブだったなあ」

快活な声でシュンが独りごちたが相槌を打つ者はいなかった。

ヘッドライトの光芒が鬱蒼たる木立に垣間見えた。

「あれちやう」

カトリーナが誰にともなく訊く。弾んだ声だった。

ホスト崩れが反応する。

ヒロユキも面をあげる。

カトリーナとホスト崩れは、期待を露わに福士に振り返った。ヒロユキもカトリーナらと視点を一にした。

福士は無言で頷いた。

「やっぱりそうやねんな」

カトリーナとホスト崩れは頭上でそれぞれ両方の掌で相手の両方の掌を一瞬だけ重ねあわせて、打ち鳴らした。強張っていたヒロユキの肩から力が抜けた。

車輦が敷地に入ると、闇に塗り潰された複数の人影が認められた。

主人は俄に身を乗りだし妻子の姿をさがした。

「じつとしてろ」

苛ついた声に主人は気圧されて引き下がった。

最初に後部座席のドアから降りてきたのは、主人だった。カトリーナらが無表情に瞥見し、興味を失ったかのように視線を逸らした。

「こちらがお気の毒な被害者さま」

車輦から降り立ったシュンが、主人を晒し者にした。主人の貌を不快と思しき感情が過ぎった。

セダンから降りてきた連中と、カトリーナ・ホスト崩れがぞろぞろと歩きはじめた。誰に促されるでもなく主人もシュンたちに混じって歩いた。

福士のいるところに、一行が到った。

居合わせたヒロユキも、シュンらの姿を目視した。

「ママ、陽菜」

主人は、素っ頓狂な声をあげるが早いか駆けだした。

拘束されて床に転がされている妻子に駆け寄って、妻子を抱き起こした。

「大丈夫か？」

必死の形相で主人が呼び掛ける。妻子ともども、主人をパパと呼び返した。

「ごたいめーん」

シュンに悪意は認められなかった。

程なくして主人が頸を巡らせた。

「早く解いてやってくれ」

犯行メンバーたちは貌を見合わせた。誰がすべき軽作業なのか判然としなかった。

シュンは、仁王立ちで、一家を見下ろしていた。

シュンの表情筋が緊張した。あるかなきかの微かな緊張だった。見開かれた双眸は、同種の個体を目視するそれではなかった。

シュンを振り仰ぎ、主人は気後れしたような反応を示した。

つと、轟音が工場全体を劈いた。

轟音は単発ではなく、連なった。

ヒロユキは反応できなかつた。カトリーナやホスト崩れもそれは同じだった。

頰れまいと藁にも縋ろうとする主人の両手が空を引つ掻く。妻子も轟音に思考力を奪われていた。地面に一体の肉体が強かに叩きつけられる音が、遊離しかけた場を現に引き戻した。シュンは平然と連射した。次いで、銃口は微塵の逡巡もなしに妻子に向けられた。母娘は交互に被弾して、ひれ伏した。銃声は弾倉が空になるまで続いた。

灼けた金属の礫を浴びた一家は一溜まりもなかった。

空撃ちになって、弾切れを識り、シユンは腕を虚脱させ狙いを解除した。

一家は、折り重なって、塊となった。その裾野に拡がってゆく染みの色は光量の乏しさに判然としない。だが、一家の気配は、雲散霧消した。

シユンを注視するヒロユキは明らかに動揺していた。カトリーナやホスト崩れもまた然りだ。だが、愕いているらしいのは、どうやらその三人だけだった。三人以外のメンバーはといえば、リラックスしているふうでもなかったが、動揺しているようには見受けられなかった。

カトリーナがやっと悲鳴をあげた。

「バラさんでもええやんか」

「聴いてねえよ」

ホストも震える声で咎めた。

シユンがゆるりとそれらの声の主を見遣った。

シユンが拳銃から弾倉を振り落とすと、地に墜ちた弾倉が虚ろに鳴った。シユンの空いている方の手が着衣のポケットをまさぐりはじめた。

ヒロユキは後退りした。脚を縛れさせながら、躰を翻し、駆けだした。

カトリーナとホスト崩れは、ヒロユキの行動の示唆するところを捉えあぐね、怪訝そうな表情でヒロユキを見送った。

果たして、ポケットをまさぐっていた手が掴んだものとは、替えの弾倉だった。流暢な所作で銃把の底から挿入された。シユンはスライドストップを解除しざま、大雑把にながら、カトリーナに照準をあわせた。

カトリーナは遅まきながらヒロユキに

做った。事ここに到っても視線をシュンからカトリーナ・カトリーナからヒロユキと右往左往させるだけのホスト崩れが三人のうち最初の餌食となった。

声にならない声を発し、ホスト崩れは、棒のように倒れた。あるいはその声にならない声は不随意ながら声帯が震えただけだったのかも知れない。横たわった躰を二・三発の銃弾が穿った。右へ左へと寝返りを打っていた躰が微動だにしなくなった。

静寂が破られた。怒号や喊声や靴音が一面を占めた。

カトリーナはヒロユキの後を追って駆けている。遠離ってゆくその後ろ姿を狙ってホスト崩れを葬ったシュンは鉄爪を絞る。銃弾がカトリーナの足許を抉り、跳ねる。銃弾がカトリーナの頭部を掠め頭髪が舞った。鉄の階段の麓まで手が届きそうな地点まで到っていた。カトリーナを宿す肉体の運動のパターンがつと一変した。平衡感覚を瞬時に剥奪され

たかのように肉体が傾いだ。傾ぐが早い。運動エネルギーが無造作に放りだされた。

カトリーナは銃弾に衝き倒されて貌や腕や脚を擦り剥いた。起ちあがれない。右の脹ら脛に被弾していた。白のミュールの片方だけが鮮やかな紅で塗り替えられていた。背中越しに迫りくるシュンを認め、カトリーナは焦った。階上へ伸びる階段の手摺りを支えにして躰を起こし、右脚を引き摺りながら階段を昇ろうとした。

手摺りを掴む手に銃底が打ち下ろされた。

カトリーナの悲鳴は、カトリーナが躰ごと鉄の階段をずり落ちてゆく物音に掻き消された。銃底に潰された手をもう一方の手で押さえてのたうち回る。

シュンは、カトリーナの傍で立ち止まった。カトリーナは横臥したままシュンを仰



ぎ見た。

「痛い。はよ手当してな。堪忍や」

紅いシーツのうえで苦痛に喘ぐ娘は、片脚に続き、片手も損壊された。

シュンの靴が、カトリーナの頭部を押さえつけた。カトリーナは口を噤んだ。カトリーナの頭部は横向きに地面に押さえつけられていた。カトリーナは眼球を巡らせてシュンの貌を拝もうとした。死神に遭ったカトリーナの貌を暗澹たるものが覆った。いつかシュンの眼が爛々たる光を湛えていた。

シュンはしゃがみ込むと、カトリーナの髪を粗雑に掴み、頭部を起こした。銃身をカトリーナの口腔にねじ込んだ。

カトリーナは、震えながら、全身を硬直させていた。

「おい」

シュンの呼びかけをカトリーナは無視した。シュンは呼びかけを続けた。だが、やはりカトリーナは眼を閉じたままだった。再

三、その遣りとりが繰り返された。

「おれをみる」

痺れを切らしたシュンがカトリーナの頭部を揺さぶった。痛みを屈して、カトリーナはのろのろと眼を開けた。カトリーナはシュンが欲情しているのを読み取った。衰弱したカトリーナの双眸に憤怒や媚びや諦めが去来していた。シュンは得も云われぬ表情を覗かせて、カトリーナとみつめあったまま鉄爪を絞った。

その一連の光景には、仲間とて怖気を覚えていのが傍目にも判る者がいた。貌を背ける者さえいた。

シュンの傍を富士が駆け抜け、階段を昇りはじめた。

シュンがカトリーナの骸を手放すと、厭な音がした。

富士に倣った。

切羽詰まった靴音が鉄の階段を駆け昇ってゆく。幾対もの靴音がそれに被さる。マズルフラッシュが闇に爆ぜ、発光する矢が放たれる。

筐体やパイプラインがひしめきあっていて雑然としている。

闇に目隠しされたまま、紆余曲折する。障害物に躰をぶつけながら進む。時折、銃弾が至近距離を過ぎった。

渴望していた光が不意に与えられた。ドラム缶が放った光は忽ち辺りを呑み込んだ。天地が引つ繰り返ったかと思いきや壁に強かに叩きつけられて息が詰まった。身動きできなかった。可燃ガスが溜まっていたのは爆発したドラム缶だけではなかった。列べられていたドラム缶の群れが誘爆した。

建物全体が底から衝きあげられたかのように縦に揺れた。

外で待機していた連中はその爆轟に弾かれた。

仲谷でさえ、須臾の間、処理に時間を要した。

俄に色めきだち、喫いさしのタバコを棄てた。

天井が撓み、飛び火が散る。飴細工のように引き千切られた金属片が放物線を描いてから床に墜ち虚ろな音を立てる。壁に据えつけられていた変圧器の蓋が外れ、壁に立て掛けられていた資材が薙ぎ倒される。辺りを火炎が支配していた。階下への退路も焰の執拗な愛撫を受けていた。

ヒロユキはフロアの一隅に追い詰められており火焰はそのヒロユキが背負う一隅を要に弧を描くように燃え盛っている。

壁を殴りつけたがびくともしなかった。

---

追っ手たちが戻ってきた。

急げ

仲谷は怒鳴った。

シュンと富士が戻ってくる。

ドライブアーズ・シートに座ったりサがエンジン掛ける。

シュンと富士が後部座席に乗り込むが早いかリサは車を急発進させた。

「仕留めたか」

「うん、ばっちり」

富士がシュンを一瞥したのを仲谷は見逃さなかったが不問に付した。

アルファロメオが走行している。

操舵しているのはシュン。

あの後、下山して、カフェ跡で賞金を山分けすると、チームは解散した。もうメンバー同士が意図的に貌をあわせる機会はないだろう。

あぶく銭を掴んでもシュンはそれを持って余っていた。そもそも金銭的に不自由していなかった。

いつかシュンはカフェ跡に到っていた。閉ざされたシャッターの傍に近づくと、微妙に浮いていた。

入ってみると、ソファでフレームノイアがパソコンを開いていた。

一旦、闖入に反応を示したものの、フレームノイアはさっさとディスプレイに視線を戻した。

シュンは貌を綻ばせていた。

「どうしたの？」

「……そっちこそ」

「なんとなく」

「……俺もそんなところだ」

会話が途切れる。パソコンの冷却ファンのバツキングにキーボードやマウスを操作する音色が鏝められる。その座に居座る膠着をシュンも攻めあぐねている。

「……また日常がはじまってしまいそうだ」

シュンはフレームノイアを見遣ったがやはりディスプレイを見据えたままだ。

「……仲谷とリサに連絡してみたが持ち主が変わっていた。仲谷やりサって名前も偽名だったんだろうな」

シュンは釣り込まれたらしく、珍しく相手が言葉を継ぐのを待った。

「……早く終わらないかな、こんな世界」  
虚を衝かれたらしい表情がシュンの貌を

覆った。無意識に考えさせられた。ややあつて、相好を崩した。

シュンはリヴォルヴァーを抜いた。

視界の端でそれを認め、フレームノイアはのろのろと視点をディスプレイから移した。

ラッチを操作し弾倉を外す。一旦、掌に弾を零し、装填し直す。金属の筒と弾が擦れあう音色が清聴。

勢いよく弾倉を回した。

「ロシアンやろうよ」

弾倉から一発だけ弾が抜かれていた。

フレームノイアの貌に表情は認められないものの、その視線はシュンを見据えていた。

「ジャンケンする？」

フレームノイアは反応しない。

「じゃ、俺からね」

シュンは臆せずに銃口をこめかみで塞いだ。

観念しかけたとき、焰の奥に観音開きの鉄扉が覗いた。

焰をかいぐる。

扉はちいさなものだったが体勢次第で潜り抜けられそうだった。身を屈めて扉に縋りついていた。だが、門には鎖が巻きつけられていて頑丈そうな鍵が掛けられていた。

背中を焦がされながら蹴りを入れてみたが徒労だった。

気が遠くなりそうになった。

天井越しに天をやぶにらみしようとした。

壁のやや高い位置に斧が掛かっている。

俄に生氣を取り戻し、斧をもぎとった。

振り下ろす。

火花が散る。

前腕が麻痺し斧を手放してしまいそうになったものの持ち堪えた。

焰はもう半ばヒロユキを捉えていた。

毀れた扉の先がどうなっているか定かではなかったが飛び込む外なかった。

廃墟から能うかぎり遠離ろうと闇雲に樹海を歩いた。鬱蒼と生い茂った植物や起伏の多い地形がヒロユキの体力を奪う。枯れ木を杖代わりにして立ちほだかる茎の束を薙ぎ倒して前進した。

歩につれて光の具合がめまぐるしく変化する。うっかり苔生した岩に体重を掛け、まともに転倒した。遣り場のない憤りを発散するため、毒づいた。背丈ほどもある断層に差し掛かり、素手でよじ登った。

せせらぎを聴きつけて、小走りになった。小川があつた。眼の色を変えて、しこたま水を呑んだ。人心地ついて、川面に映る己の像に気付いた。煤や泥や埃で、貌も髪も汚れきっている。先ず、貌を洗ったが、結局、頭ごと小川に浸した。

髪を絞っていると、物音がして、ヒロユキはあからさまに緊張した。身構え、息を

潜めた。だが、茂みから野兎が飛び出してきたことよって、懸念した事態ではないことが判明し、ヒロユキは大きく息を吐いた。

左肩が疼き、思わず傷口を手で塞いだ。塞いだ掌を抜けてみるとべったりと血糊がついていた。自ずと舌打ちが漏れた。日没まで残すところあと三・四時間といったところか。ヒロユキは再び下山を始めた。

舗装された通りにヒロユキが姿を現した。

全身泥塗れで、髭が伸びていた。兎に角、路なりに歩いた。二時間後、軌道を見つけ、それに沿って歩くことにした。駅までの道中には鉄橋も架かっていたが、何とか渡った。鈍行を乗り継ぎ、東京へ戻った。

見慣れた場に辿り着いた。日本で最も利用客の多い駅のひとつであるその駅は、地下に潜っていて、ヒロユキは改札前の広場にいる。天井が低い。改札の正面は車寄せになっ

ていて、吹き抜けになっている。吹き抜けから、ビル街が覗く。

場の中心に、全方位から人々が放射状に集い、離合してゆく。スーツを着用した者もいれば、貌じゆうにピアスをつけたバンドマンもいる。大学生の集団がいれば、ナンパに励む強者もいる。華やかな衣装を身に纏った娘も浮浪者もいる。待ち合わせによく使われる交番の前には、二十人程度が屯している。この広場はいつだって混雑していて且つ流れが速い。だが、巧みに人々は難なく擦れ違つてゆく。ヒロユキは何故か懐かしさを覚えた。だが、行く当てもなかった。

数日間、カプセルホテルに潜伏していた。その間は、ひねもす所在なく過ごした。様々の思考や感情が去来し、神経が休まることはなかった。

生きた人間が弾け飛ぶ光景を目の当たりにした。目の当たりにしたものの、現実のものとは未だに受け容れ難かった。一家は実にあっけなく生命を喪った。スイッチを切られたかのように、つと動かなくなった。カトリーナの断末魔は、悽愴な波動が辺りを呑み込んだ。

炙り殺されそうになった。運がよかっただけで、死んでいても不思議ではなかった。火炎に背中を焦がされながら懸命に斧を振るった。鈍い感触がありありと前腕に蘇る。

尻尾を巻いて遁げるか。だが、死者の街に棲むことは最早能わなかった。

その円形の広場からはビルの壁に設置された特大ディスプレイが見えた。その広場は、地平と差別化を図るためか、申し訳程度に迫りあがっていて二・三段ほどの階段があった。そこにヒロユキは腰掛けていた。

所在はない。眼前の絶え間ない横断を視るともなく視ていて、それに飽きると、ディスプレイ

プレイに映し出される広告を眺め、ディスプレイに飽きると再び、視線の角度を元に戻した。

カフェ跡に足が向いていた。

蛻の殻の筈だった。

試みると、あっけなく侵入はできた。

歩を進め、制されたように立ち止まる。

ヒロユキの視線の先には、ソファから零れ落ちてしまいいそうな体勢で頭から血を流して絶命しているフレームノイア。

テーブルに置かれていた拳銃を拾う。

何者かが入ってくる気配がした。



最終章

殺す



カフェ跡に足が向いていた。

蛻の殻の筈だった。

試みると、あっけなく侵入はできた。

歩を進め、制されたように立ち止まる。

ヒロユキの視線の先には、ソファから零れ落ちてしまいうるような体勢で頭から血を流して絶命しているフレームノイア。

テーブルに置かれていた拳銃を拾う。

何者かが入ってくる気配がした。

一旦、対峙して、相手は逃げだそうとした。

福士だった。

ヒロユキは撃った。

フレームノイアのパソコンのディスプレイを覗き込む。

ターミナルが起動されていて、コンソールに住所が記されていた。

ガード下の安酒場に今夜もなれの果てが居座り醜態を晒していた。鉄扉の開閉音に逐一反応し、アルコールで濁った眼差しを不躰に向けられた一見客は一杯だけでそそくさと辞去した。

カウンターにだらしなく突っ伏して、黙々とバーボンを呷る。長い髪を束ねているが頭皮が透けてみえる。肌は老化が進行している張りが無い。着衣は着古されていて解れさえある。時代遅れのブーツは靴底が剥がれていた。

ジョン・レノンの唄を真に受けた男は、どことなく垢抜けない風貌だった。上背はあるが短足だし、貌の造作も美しい部類ではなかった。その時点で資格がないことを認められずに不惑を過ぎた。仲間は一入また一人と減っていった。果たして誰もいなくなった。場末のスナックでコンパニオンをする女と同居していたが、展望は暗澹たるものだった。その女は惰性で男の世話をしているに過ぎな

かった。男は素面であることに堪えられなかった。だから、酒浸りだった。己の醜さに立ち向かう勇氣はおろか直視することさえもできなかつた。安酒場ではいい物笑いの種で、それも感じとっていた。だが、何の手も打たなかつた。

人の出入りに、またしても男はのろのろと鉄扉の方を振り向いた。現れた人物は、男の視線に怯むことなく男を見返してきた。ややあつて男は入ってきたのがヒロユキだと気付いた。いつかたかつたことも忘れ、ぬけぬけと笑い掛けた。

暗闇にちいさな炎が閃き、男の躰が弾け飛んだ。男はカウンターにしがみつこうとしたが床に転落した。

硝煙の匂いを置き土産にヒロユキは立ち去った。

床に這い蹲った男の後頭部に、倒れたグラスから零れたバーボンがカウンターから垂れた。掃除の行き届いていない安酒場の

---

不潔な床に貌を押しつけられて男は旅を終えた。

窓枠に手をつき尻を差しだす雌の躰は、うつつすらと脂肪に覆われていて、ファッションモデルの挑むような躰つきとは対局にあるそれだった。背中に幾つもの痣やみみず腫れがあった。背中だけではなく、臀部や脚も然りだった。貌は髪に隠れていたが、泣き出しそうな口許だけは判別できた。

「じつとしてろ」

有無を云わせぬ声に、彼女は怯え、眼に見えて萎縮した。

シユンは淡泊な眼差しで、発光体が散らばった都市を切り取るホリゾンとそれに収まる妙な姿勢の肉塊を眺めていた。錠剤を口腔に放り込む。ぼりぼりと噛み砕き、希釈した蒸留酒で嚙下した。喉を鳴らし、蕩けるような息を漏らした。

雌は、シユンの動向が気が気でないらしく、頻りに身じろぎしている。全身の傷痕は悉くシユンの手によるものだ。拳や蹴りや鞭や蠟によって刻まれたシユンの所有物である

ことを示す烙印だった。

薬物が作用しはじめるまでシユンは彼女を静観し続けた。彼女にとっては結構な体感時間だった。四肢を虚脱させていたシユンの様子が俄に変化した。どうやら火が入ったらしく、徐に壁に預けていた上体を起こした。

シユンの豹変を背後で感じ取った彼女は思わず身を竦めた。一步また一步と歩んでくる気配に翻弄された。全身の毛穴が一斉に塞がるのが判った。為す術もなく凝固している間に、移動が終わった。

窓に極めて冷静な様子シユンの姿が映った。ペットは改めて怯えた。差しだされた臀部をしげしげと見下ろしていたかと思うと、シユンは不意にしゃがみ込んで、貌を押しつけて、頬ずりを始めた。柔らかな質感にシユンは夢中になった。体重を掛けられて、女手では二人分の体重を支えるには無理があった。健気にも持ち堪えてい

たが、遂に、崩落した。床に引きつけられた。彼女に依存していたシュンも、彼女を下敷きにしながらも、倒れた。

彼女は慌てて謝ろうとしたが間に合わなかった。至福のときを唐突に取り上げられたシュンは、逆上した。さっと体勢を立て直すや、彼女の髪を鷲掴みにして、暴々しく床に押しつけた。彼女の悲鳴は床に相殺されていたものの喧しく寝室に響いた。シュンの眼は血走っていて怨恨の情に充ちていた。気が済むまで、シュンは哀れなペットを虐げた。やっとシュンが鷲掴みにしていた手を離すとその五指には少なからぬ量の毛髪が絡みついていた。

身に余る恐怖と戯戯が相俟って彼女は呼吸困難に陥っていた。そんな彼女にシュンは事もあるうか欲情した。臀部に手を掛け、爪が食い込むのも構わずに押し広げた。恐慌状態にありながらも彼女は拒絶しようとしたが、一溜まりもなかった。

性器でない器官に屹立した性器をねじ込まれた。しかも渴いていて、筋肉が断裂しそうなくらいの激痛に見舞われた。彼女は叫喚するばかりだったが、それが却ってシュンを掻き立てた。分析できない衝動に強かに酔ったシュンはいっぴくなく硬くしていたし早かった。直腸に断続的に注ぎ込まれた。注ぎ込まれる都度、彼女の全身が波打った。

欲望を充たしたシュンは、一滴残らず排泄すると彼女を放ってダブルベッドに戻り、軀を投げ出した。嵐の余韻に翻弄されながら、シュンは刺客の到来を待っていた。憤怒を湛えた福士が現れて己に牙を剥くことを。

向日葵の頸は、皮一枚で繋がっていた。人が変わってしまったせいで抱えていた客の大半に指名替えされ、仕事は自ずとヘル

プばかりになった。情緒が不安定なためフリーの客にもつけて貰えなくなった。それでも向日葵は他に行くところがなかった。この陰鬱とした暗がりから脱けだしたとて、生きていける自信もなかった。

店長は静観していたが、向日葵が辞意を漏らしたら慰留しない腹だった。それどころか、寧ろ辞めると云いだすのを待っていると、という方が的確だった。

向日葵の店は四〇分のセットの間に三回転のシステムで、指名した娘が二〇分、二人のヘルプが一〇分ずつ接客するのが常だった。待機していた向日葵に声が掛かり、化粧を直した。未だに優れない顔色だった。短期間に見違えるくらいに歳を取り痩せ細ってしまった。

ボーイに、ボックス席にエスコートされた。他の誰かの接客の引き継ぎだった。向日葵は愛想笑いをつくり客の隣に座った。心なしかまだ温もりが残っているような気がし

た。

客は私服だが派手ではない服装で大人しそうだった。見掛けない貌だった。それもそのはずで、その客は一見だった。

向日葵はぎこちない座を解そうと当たり障りのない問いを投げかけたものの、反応は芳しくなかった。対応に窮し、向日葵は客のベルトに手を遣った。たじろぐ客の頸に手を回し、唇を重ねる。

客はされるがままだった。いつか股間に向日葵が貌を埋めていた。めくるめく快さに客は貌を蕩けさせた。向日葵は早く終わらせたい一心で急いで頭を上下させ手淫も加えた。一層、客の躰に力が入った。向日葵は待ち構えた。

客の躰がびくんと跳ね、向日葵も静止した。排泄物を零さないように注意を払いながら、引き抜いた。客の後始末をしてやりながら、己の口許をおしぼりで隠した。

人心地ついたところで、ボーイが現れ、

交代の旨を告げた。向日葵は席を離れ待機室に戻った。ドアを潜るや、表情が消え失せた。

向日葵のサーブイスを受けた客はまだ時間ではなかった。次のコンパニオンが現れるまでにインターヴアルがあつた。小柄で肩幅が狭く彫りの浅い貌の客は、何やら考え込んでいるふうだった。思考は次のコンパニオンの到着によってカットされた。

向日葵に代わって客の隣に座つたのは、器量は下の上だがスタイルのいい茜と名乗る女だった。

事は終わっていたので、話でお茶を濁した。そのさなか、客は思いついたように訊いた。

「さつきついてくれた方はどちらのご出身でしたっけ？」

茜は何も察知しなかった。

「ええと、確か、群馬とか栃木とかだったとおもうけど……私、青森だから、あの辺って

あんまり区別つかないんだ。……でも、なんで？」

「どこ訛りなのかなと思ってですね」

やがてセット終了を告げるボーイが現れ、その客は延長の勧めを丁重に断り、地下をあとにした。

文明の過保護の恩恵によって生かされてる個体は、名もない地方都市で分相応に暮らしていた。うだつのあがらない会社員で、上司・同僚のみならず、後輩からも信用されていなかった。自立もできずに、いい歳をして、生家に棲んでいた。

先日、出張で上京した折りに風俗店に立ち寄った。無性に、というわけではなく、酔っていたのと呼び込みの押し強さに折れてというのが実のところだった。幸いにも良心的な店だったが、思い掛けない貌を見掛けた。監獄が社会の縮図であるよう



に、ありとあらゆるコミュニケーションが然りだ。彼は生まれてこのかたずっと虐げられる個体でありつづけた。小・中・高と、ガス抜きに用いられつぱなしだった。

あれは中学一年のときだった。放課後、素行の悪い連中に取り囲まれ、玩具にされていた。連中は加虐を心から愉しんでいた。線が細くどこからどうみても戦士には向かない彼は、されるがままだった。拳や蹴りや肘の飛礫が彼を打擲し、彼は輪の裡で球技の球のように扱われていた。

それが一頻りすると、連中は自ずと趣向を変えた。

服を脱げとの命が下された。まごついていと、獰猛な口調で促され、どこまでも弱い彼は敢えなく屈した。

彼を取り囲む一団に、女子生徒が混じっていて、戯けた悲鳴をあげた。躰を赦すことにより彼らに取り入っていた少女だ。彼女こそ、将来に於いて向日葵という名で呼ばれる

ようになる少女だった。

洞穴での邂逅が、歳月に埋もれていた忌まわしい記憶を呼び覚ました。再び封をしようとして試みるも果たせなかつた。眠れなくなり、日常生活に支障を来すようになった。彼には与えられた手段がたったひとつであるようにおもえた。

年端もいかぬうちに一般的欲望の対象を介してシュンはヒトの泪ぐましい浅ましさをまざまざと衝きつけられてきた。札束をちらつかせれば大抵の人間は意のままに誘導することができた。

一七のシュンの潤沢な小遣いと金離れのよさに誘き寄せられた取り巻きたちを引き連れて連日のように祭りを催していた。誰かが調達してきたドラッグを摂りながら味も判らないのに高価な酒を浴びるほど呑み乱交に興じた。思えばあの頃が絶頂期だった。

夜通しの乱痴気騒ぎを乗り切って、ハイヤーで帰宅した。シュンの生家は近所の住人らの間では「御殿」などと揶揄されていた。広々とした敷地を贅沢に使っていて、大きくて、見栄えの豪華な建物だった。

疲れ切った躰を引きずって玄関を潜った。人気がなかった。それは平素のことだったから別段気に留めなかった。シャワーを浴びるのも億劫だったがたつぷりと汗を吸収した

シャツがべたつく方がより億劫だった。

着衣を脱ぎ棄てて、浴室の扉を開けた。視界を塞がれた。視界を塞いだものの全貌を捉えようとシュンはのろのろと視線を這わせた。白地の衣は、風を孕んでは追い出し収縮を繰り返していた。高い位置にある小窓から午前の斜光が入射していて眼を射た。天井から吊り下がったそれは人の形をしていた。長くて柔らかな髪も、衣と同じように、風に翻弄されていた。肌の質感が蠟人形のようなだった。風の具合によりその貌が覗いた。

母だった。

父は実に鬱陶しそうに母の死の事後処理をこなした。愛情は一片もなかったらしい。四九日が過ぎるとさっさと妾と籍を入れた。シュンには何の断りもなかったし「新しいお母さん」を紹介されることもなかった。父が御殿に帰ってくることも皆無

になった。シュンを係留するものは何もなくなった。傍目には破滅を希求しているかのような暮らしぶりだった。高校に通わなくなり、放蕩に明け暮れた。カネをばらまき毎晩ボトルを開け夜毎違う雌を抱いた。

やがて事件が起こった。尤も誰もが予感していた事態だった。取り巻きの一人が薬物取締法違反で検挙され自ずとシュンにも捜査の手が及んだ。御殿でのパーティーのさなかに踏み込まれた。ちようどキメていたところで取り繕いようもなかった。パーティーは台無しになり取り巻ちは一様に色を失っていたがシュンだけは違った。シュンの薄笑いは薬理作用のみによるものではなかった。

逮捕され新聞沙汰になり高校は放校となった。だが、父の横綱さながらの立ち回りによる起訴猶予の運びとなった。一方、取り巻きの中には起訴され有罪判決を受けた者もいた。釈放されたシュンに待っていたのは退去命令だった。

厄介払いされた。東京にマンションを用意され転居させられた。土地勘もなければ取り巻きもいない。気が遠くなるようだった。それでも生活しているうちに、人間関係が形成された。

リサの素性は識らなかつた。だが、孤独感を紛らわすには充分だった。孤独じやないような気になれた。やがて、仲谷やフレームノイアを紹介された。福士は同じ輪に属していたものの親密ではなかつた。

上京して、シュンは、郷里が井戸の底だったことと己がそこに棲む蛙だったことを識った。また、地方の富豪が鶏口に過ぎなかつたことを識った。井の中では裕福さについて右に出る者がいなかったが、此処ではシュンも影が薄くなった。

シュンの育った家庭は、父不在つまり理不尽な父権の傘下になかつた。不運にも温室育ちの母親の未成熟性が重なった。母の溺愛と相俟って、シュンは去勢も割礼も免

れて生理学的に成体となり制度上も一個の人格となった。

都市を一望できるスクリーンガラスの傍に佇んでは、勘違いも甚だしい妄想に耽った。己はシュンであり、己以外の個体は己の手となり足となる作動体に過ぎないのだと。己以外の個体は都合のいい奴隷なのだ。

健全な人間であれば、シュンと軽く接してみればシュンの欠陥を感知し、距離を置いた。だが、例えばシュンの実母のような個体はシュンのような個体に取り込まれてしまうのだ。シュンが日常的に陵辱している色白の女もそうだ。云いなりになることは実は楽だ。責任を放棄できるのだから。

シュンと仲谷たちは、荒稼ぎした。司令塔は仲谷だった。仲谷はシュンの自他の懸隔にまるで無頓着なところに着眼しシュンに人集めを任せた。リサやフレイムノイアや富士もそれぞれの得意分野で暗躍した。彼らが主謀し、詐欺や強盗や窃盗で富を掻き集め、連日

連夜祭を催す事業を支えた。スラム育ちの健気な女がカネで転ぶのは痛快だった。躊躇っていたくせに一線を越えるや微塵の羞じらいもなくなった。端金で喜んで危ない橋を渡る冴えない小僧のはしやぎようも失笑を禁じ得なかった。実に不毛な日々だった。だが、代替案も思いつかなかった。

リサとペットとの情事がシュンをしてシュンたらしめていた。シュンはリサの鋭な眼差しに母を重ねていた。性と無縁の筈の母が赤黒い裂け目を自ら押し拡げてシュンに跨り暴々しく縦に揺れたときの鬼気迫る様子を想起していた。ペットはシュンの過剰な自己愛を慰めた。生物は無気力を学習するという。ヒトはメリットもデメリットもない行為を為さないと。ペットは従順で生あるダッチワイフだった。意のままになる人形はシュンのお気に入り、お気に入りだからこそ苛め抜いた。イミテーションでないと確信したさに衝撃を

与え続けた。

シユンは実はリサにもペットにも分かち難いほどまでに依存していた。薬漬けの日々によつて満身創痍だった。父にも母にも見放され、孤立していた。辛うじて正気を保っていたのは二人の女が傍にいたからだだった。

あ のとき、縊死を遂げた母親の屍を天井から降ろし硬くなった母体を姦した。

これ見よがしにマスメディアがこの国の爛熟ぶりを喧伝していた。絶えずそんな情報に晒されながら箱庭のような町の長屋に棲んでいた。自らの境遇を見窄らしく感じてでも不思議ではなかった。

箱庭の町では、誰もが環から逸脱することに怯えていた。だからこそ、環から零れた者を滅多打ちにした。弱さを優しさに転ずることもできずに弱肉強食は際限なく根深くなつてゆく。

無知であることに居直り、「人はみな同じものだ」などと嘯き、安酒で気を大きくして、散々虐げられているだろうに第三者にそれを転嫁し溜飲を下げる。環境に働きかけてより善くしようということも端から諦めていて夜毎愚痴りながら酔い潰れていった。

箱庭の町に充満していたのは、怠惰だった。主体性のない個体が馴れあつて細々と暮らす様は、醜悪と形容する外なかった。あの町ではよほどの厚顔でなければ生きていけな

かった。

居場所が、なかった。最大公約数を持たないヒロユキは、しぜん孤立を余儀なくされた。頑是無い物事に級友たちが夢中になつてるのが訝しくおもえて仕方なかった。期せずして、ヒロユキは環から零れ落ちた。

ヒロユキの道程は暗澹たるものだった。音楽に出逢うまでは。

音楽は、ヒロユキにとって、外界と通信する唯一の手段だった。

ヒロユキは縋った。それが蜘蛛の糸だとしても選択の余地がなかった。

上京。

躰を宙に投げだされたかのような感覚にヒロユキは気を取られた。巨大サーキットを駆け巡る怒濤にひたすら圧倒されるばかりで手をこまねいていた。ちがう世界にやってきたような気がした。

これまで憎悪するのみだった陸の孤島に

あつて気取つている連中に憐憫の情を覚え  
た。ローカルなサーキットには取り残された  
人材ばかりが雁首を揃えていた。あまつさ  
え、疎らだった。彼らは戦おうともせずに  
悟つたふうを装い辛うじて面目を保つてい  
た。とりもなおさず、彼らは不健全で醜かつ  
た。

抗原抗体反応さながらに、どんな刺激もや  
がて飽きがくる。マジックの種は識らない方  
がよい。サーキットのスケールに関わらず、  
プレーヤーがヒトであることに変わりなかつ  
た。個体間に美醜も優劣も認められた。

プアだった環が華やいだかのようにおもえ  
た。だが、それは単に数が増えただけであつ  
て、垂直的な進展はなかった。仲間の数は飛  
躍的に増えたが、鎬を削るような間柄にはな  
りようがなかった。

多くは、バイトと音楽のどちらが主たる活  
動なのか客観的に見分けがつかない暮らし  
ぶりだった。共同体が彼らの作品やパフォー

マンスを我先にと購う光景は想像だにでき  
なかった。それにも関わらず、彼らは音楽  
を志していて、自棄になつているととれな  
いこともなかった。彼らはみなヒロユキで  
ありヒロユキではなかった。偶々、音楽に  
よつて小集団に認められたことにより、藁  
をも掴む溺れた者のように、音楽にしがみ  
ついた。

そして、誰もいなくなつた。

裕福な家に育つた者だけに備わつた驕慢  
ささえヒロユキは妬んだ。スラムに育ち叩  
かれつばなしの半生を歩んできたヒロユキ  
とじゃぶじゃぶとカネを注がれて育つてき  
たシユンの身上には雲泥の差があつた。

日曜日も夏休みも行楽に連れていつて  
貰つた記憶などなかった。盆で誰もいない  
灼熱の空き地に立ち尽くしていた。炙り殺  
された蚯蚓の死骸に蟻が集つていた。積乱  
雲が気の遠くなるほどに堆かつた。

あからさまな格差を衝きつけられて子供の頃を過ごした。子供ながらに玩具をねだるところとさえ憚った。暮らしに追われる母は鬼気迫っていて機嫌を損ねないように絶えず緊張していなければならなかった。

弄びやがって。するすると降りてきた糸を石に嚙りつくようによじ登ってきたというのに、にべもなくその糸を断たれた。向日葵のささやかな夢さえも無惨にも雲散霧消せしめられた。なのに、生まれつき裕福で恵まれた連中がいる。依怙鼻肩されている連中がいる。親の援助で都心の一等地の家賃数十万の室に棲み、申し訳程度に会社勤めしている奴がいる。運の良さを己が才覚とすり替えて得意になって他人を見下す奴がいる。持たざる者の苦労も識らずに優越感から持たざる者に同情の念を抱く奴がいる。おまえら、マリ・アントワネットかつての。

こんなところまで誘き寄せられ挙げ句の果てには梯子を外された。大半の人間が釈然と

しないままなのに運動は止まらず翻弄され続けている。真綿で頸を絞めるが如き弱肉強食は陰湿で執拗だ。

絢爛たる上澄みを以て無数の魂を誑かしさんざ振り回して消耗し自らの糧にしておきながら襤褸のように投棄する東京に憤怒を覚えた。不毛な濫費に支えられる場にあつて人々は欲望の赴くままに振る舞うことを強いられる。生き馬の眼を抜くような様相を呈しているがその実マツチポンプの争いに於いて、真理は軽んじられ、誠実さは命取りとなる。

破綻していることを誰もが識っている。だが、誰もそれを明言しない。認めたくないからだ。主体性を放棄した追従の果てしなき連鎖によって行進が延命される。人々は意図的に感性をミュートし尤もらしい表情で運動に身を投じる。

毎日のように人身事故で電車が遅れる。おそらく似たような境遇にあるであろう



人々はその死を悼むこともなく、急を要する用件があるでもなかりうにこれ見よがしに舌打ちし毒づいてみせる。

ホームに到る階段に押し掛けるヒトの群れに紛れ、ヒロユキは閉口する。互いに押し合いへし合いして、殺伐とした雰囲気醸し、神経を磨り減らす。ホームに佇む者にアピールすべく設置された巨大な広告の裡の一点の曇りもない笑顔さえ巨大企業の思惑が見え透く。

ヒロユキは眉を顰めてみた。だが、何も覆らなかつた。

アルファロメオやX Lを駆り一等地の室に棲む幼児の純真さを保つ連中はきっと神の寵児に違いない。そして、ヒロユキは己や向日葵のことを私生児だとおもった。あいつらがおれたちの取り分をごっそりと横取りしやがった。あいつらさえいなければ識らなくて

もいい飢えを味わわなくても済んだ。武器を与えられたつもりだった。だが、それは螻蛄の斧だった。有頂天になっているうちに、劣悪な住居や労働環境を押しつけられた。安酒で痛みを散らすしかない。だが、あいつらはどうだ。まるで踊るようにでも生きている。あいつらにかかればブルースも文学も教養のタブローに取り込まれる。向日葵が洞穴で夜な夜な見知らぬ男どもにその身を捧げ暮らしの糧を獲ているというのに。スクリーンガラス越しに木枯らしに苛まれている乞食を目の当たりにしながらとても喰べきれないコース料理を堪能するあいつらは面妖にも貧困撲滅を祈念する意志を表すというリストバンドを手頸につけている。

神よ。不在のそなたの代わりにそなたの愛する者を狙うとする。彼らに罪はないかもしれない。だが、我が生まれながらに冤罪により罰され続けてきたことについての

贖いを求める。打ち頸は覚悟の上だ。

シュンの棲むマンシオンはリゾートホテルと見紛うような外観だ。居住用の建造物だといふのに生活感是一片も認められない。それといふのもこのマンシオンはランドマークの一部に組み込まれているのだった。

シュンのマンシオンに到る径にヒロユキが姿を現した。歩調が怒気を孕んでいる。アスファルトを刻む靴音がハーモニクスあるいは拍子木の乱打ようにお伽の国のようなこの界限を衝き抜けてゆく。

光量が少なく表情をつぶさに読みとることは能わない。だが、気迫が毛穴という毛穴から揮発しているのは明らかだった。憤怒は恰も炎のようにヒロユキを包み込み、とうに精神的にも肉体的にも限界なはずのヒロユキを駆り立てていた。

向日葵はたった現在も体液を口腔で受け止めている。僅かな銀貨と引き替えに他人の寂寥を買い取っている。あの洞穴から向日葵を

逃がす。もうそれだけがヒロユキに残された情熱だった。

シュンは夜景を眺めるともなく眺めていた。辺りにシュン以外の姿は見当たらない。シュンはガウンを身に纏っている。その容貌は牝の剛健さと牝の繊細さを併せ持っていて、やはり蠱惑的な魅力を湛えていた。だが、その貌つきは、例によって、完全に吹っ切れたそれで、脅威を形成していた。

眼下に漆黒のカンバスに多彩な光の粒子が鏤められている様が拡がっている。その俯瞰図はまるで己が王座に就いたかのような錯覚を催した。その眺めは、シュンの自己愛を愛撫するアイテムだった。

背後で物音がした。ただならぬそれだったが、シュンは悠然と振り返った。

廊下と広大なリビングルームを隔てる扉を背にして、一人の男が立ちはだかつてい

た。前髪が目許を覆っていたしかと人相を識別することはできなかった。前髪から覗く双眸の湛える峻烈さにシュンは心奪われた。

紛れもなく、ヒロユキだった。

二人の視線が真つ向に衝突し纏れあう。組んず解れつし、鬨ぎあう。刻々と形勢は変化するものの一進一退の攻防が続く。拮抗し、反撥しあう。二人を媒介する空間が軋み負荷に堪えられなくなる。果たして、先に口を開いたのはシュンだった。

「よくぞご無事で」

シュンの口角には笑みさえ認められた。ヒロユキは意表を衝かれ微かな揺らぎが貌に表れた。

「下賤の民の生命力はみあげたもんだな」

ヒロユキの表情が険しさを増した。

シュンは怯まなかった。

「そんなにカネが欲しいか？」

ヒロユキは応えなかった。シュンは下卑た嗤いを貌じゅうに貼りつけてヒロユキに視線

を這わせた。シュンはつと表情を引っ込めた。

お前は選ばれていない。

声色が変わっていた。いつもの飄然たるそれではなかった。明澄だが強い意志を孕んだ声には妙に説得力が備わっていた。ヒロユキはそれに撃たれ眩暈を萌した。だが、何とか持ち堪え、踏ん張った。

「俺は選ばれている。生まれも育ちも容姿も知性も牡としても俺は別格だ。俺とお前じゃ比較するのもおこがましい。お前は死ぬまで糧を獲ることに汲々とせねばならない。何故ならば、選ばれていないからだ。俺は祝福されてこの世界に降臨した選ばれし者だ。お前のように誰からも必要とされていない虫けらとは違う。一切は、俺のために用意されていて、俺の赦す限りに於いて世界は存続しているんだ」

滔々とソロを披露するシュンは次第に余裕を失くしつつあった。風格のある態度は

鬨りをみせ圧倒的優位にありながら、逆の立場にあるかのようだった。果たして、シユンは逼迫していた。

「お前らは端ガネで尻尾を振る。お前らは自らの醜さに無頓着だ。お前らは恥を識らない。お前らは紛う方無き虫けらだ」

「御託はもう沢山だ。さつさと俺の取り分をよこせ」

それは偽らざる本音だった。一刻も早く一般的欲望の対象を奪還して役目を果たしてしまいたかった。シユンの垂れ流す陰惨なものがこの場に充満していた。毛穴を塞ぐほどに濃かった。

シユンは一頻り嗤笑を発露してから、目配せによって、ヒロユキの目当てのものの在処を指し示した。どうやらクローゼットに収まっているらしかった。ヒロユキの視線がシユンとクローゼットの間を右往左往した。

シユンを牽制しながら、ヒロユキはクロ-

ゼットに近寄ろうとした。

そのとき、物音がした。ヒロユキは咄嗟に銃口を向けた。クローゼットと相對する扉の辺りに現れたのは、半裸の女だった。キヤミソールの片方のストラップがずり落ちていて、そちら側の乳房が半ば顕わになつていた。傷んだ乱れ髪で貌は判然としない。病的なまでに痩せ細っている。

ヒロユキの醜態に頬を緩めていたシユンが女の出現に不意に態度を一変させた。

「戻れ」

ペットに命じた。だが、ペットはかぶりを振った。口許は泣き出しそうな形だった。女がシユンの敵を睨めつけた。

ヒロユキと女の視線が絡んだ。

真つ赤なルージュが蒼白いカンバスを汚していた。追い詰められた小動物のような目つきは痛々しくて鬱陶しかった。女の貌に見覚えはないはずだった。だが、どこか懐かしさを覚えた。

ややあつて、双方とも、示し合わせたかのように、愕然たる表情を浮かべた。

女は、俄に挫かれ、貌を背けた。ヒロユキはといえば、女のその反応に確信した。

その女こそ、あのどんづまりの町で、姉と慕った百合だった。

百合は、ヒロユキが思春期に入る頃、両親の離婚により、ヒロユキと過ごした町を離れて別の地方都市に移り住んだ。

家庭環境が一変し、大学進学を断念せざるを得なくなった。

上京してみたものの、高卒の若い女が一般的な職業で生活してゆくには無理があった。生活苦から、キャバクラのバイトを始めた。やがて、昼間の仕事を辞めた。

高価なもので武装していなければ、舐められて、つけこまれる。

カードローンで防具を増やしていった。奢られる以外の食事は粗末なものばかりだった。

夜遊びを覚えた。遊び仲間は入り替わり立ち替わり増減を繰り返した。

ほんの好奇心で薬物を摂取した。体験したことのない体感新鮮だった。

疲弊していることを自覚できないまま夜な夜なオージー・パーティーの輪に加わりつづけた。

数年の間に、風俗に転落していた。一旦、負債は精算できたが、入ってくる纏まった金額を制御できなくなっていた。

クラブでナンパ待ちをしていたらシユンが声を掛けてきた。

ヒロユキとペットが一脈通じているとはシユンには識る由もなかった。ヒロユキとペットが貌をあわせて生じた予想だにしない結果に、シユンも感化された。余りの意外さにシユンが狐に抓まれたようにヒロユキを見た。

シユンの視線にヒロユキは姉から眼を離

し、シュンを見遣った。ゆらりと、見遣った。ヒロユキの形相は、悽愴だった。例えば自滅を辞さない刺客が意を決したそれ、見る者をして震撼せしむそれだった。

抜き身の殺意を衝きつけられたシュンは苦し紛れに妙案に思い至った。一旦は怖じ気づいたものの持ち直した。

「客人をもてなせ」

シュンがペットに命じた。ペットはシュンの真意を計りかねシュンに哀れっぽい眼差しを向けた。

「もてなせ」

まごついていたペットだが、シュンの語気に弾かれたように、踵を返し、躊躇いがちにヒロユキの方に向かって歩きはじめた。

意表を衝かれヒロユキは反応できずにい

た。姉がごくさりげなく身に着けていた薄衣を捲った。永らく押んでいなかった姉の果実が呈示された。

「……私は……ダッチワイフです」

ヒロユキは愕然とした。姉は言を接いだ。

「ご主人様のお赦しを賜りました。私を思う存分おもちやにしてください」

窮地に立たされた姉は終いには居直つていた。姉の背後に佇むシュンはいえば、興味津々といった体で、なりゆきを注視していた。

ヒロユキは姉とシュンを交互に視線を向けた。あられもない姿を晒す姉は悪びれた表情をしていた。ヒロユキは姉と向き合った。姉が築いた砦は手強かった。何者をも寄せつけぬ拒否の姿勢だった。だが、ヒロユキは諦めなかった。断腸の思いを共に、懸命に瞳の奥底を目指した。

ゆりちゃん

不意に姉の仮面が粉碎した。ややあつて、姉の頬を一縷の泪が伝った。

ヒロユキは憑き物が落ちたかのように柔らかな表情になった。徐に拳銃を構えた。

---

シュンは動転し、ヒロユキを制止しようとしたが、遅かった。

銃声が姉を撃ち抜いた。

シュンはのろのろとヒロユキを見た。

ヒロユキの前髪の奥から覗く双眸こそ、

シュンが最期に目視したものだった。

向日葵はその晩も地の底だった。

給料日前とあって店は閑だった。向日葵は通しだったがフリーの客の接客と後輩の客のヘルプについたただけで殆どの時間を所在なく過ごした。

控え室が手狭に感じられるくらい頭数が揃っていた。

久々にドアをノックする音が控え室に充ちていたざわめきを鎮めた。

放心していた向日葵は、同僚に声を掛けられて、我に返った。

蜘蛛の子を散らすように指名客という指名客が去ってから随分時間が立っていた。戸惑いながら、パイプ椅子を立った。



見慣れた、見飽きた境界の筈だった。

だが、かつて訪れたことのない場所のようにおもえた。

いつだって人通りは多かったが、今夜はいつにも増して混雑していた。

ヒトの流れが澱み、さして幅があるわけではない径の所々に人溜まりができていた。

ヒロユキは索然としつつも澱んだ河に漕ぎだした。

背後から割り込んできたヒロユキに対し誰もが苦々しい感情を懐いた。だが、やはり誰もが、ヒロユキの放つものの峻険さに気後れした。

人々が屯する先にスペースが空いているのが見通せた。訝る前に、通りを狭窄する雑居ビルの横列を紅い光が規則的に舐めているのに気づいた。

警察車両と救急車が所狭しと停まっている、捜査員や救急隊員が慌ただしく行き交っていた。

ヒロユキは規制線に行く手を阻まれた。

救急隊員らによって担架が地底より地上に担ぎだされた。

ビニールシートにくるまれた物体のサイズはゴルフバック程度。

担ぎ手たちは急いでいなかった。ビニールシートから白い帯が零れた。

前腕だった。手首には見覚えのある綾が認められた。

つと、ヒロユキの至近で烈しい光が炊かれた。

「こちら現場です。

午後十一時頃、こちらの風俗店に於きまして接客中に女性従業員が来店した客の男に刃物で襲われる事件が起きました。女性従業員は頸や貌などを滅多刺しにされたとのこと。通報により救急隊が駆けつけましたが今し方死亡が確認されました。

なお犯人は……」

ヒロユキから膂力が喪われる。握り締め

---

ていた紙幣がヒロユキの掌から脱けだし散乱する。

やっと人々はヒロユキが拳銃を所持していることに気づいた。

キヤバ嬢の悲鳴。

ヒロユキを取り囲むスペースが出現する。

咆吼をあげながら、ヒロユキは警官隊に突っ込んでいった。

# 消費社会の神話と例外

克典

完